

単位制・無学年制高校の生活の諸相(2)

—面接調査での5つの事例をもとに—

学生相談所 三戸 親子
東京都立新宿山吹高等学校 菊地 まり
宇都宮大学教育学部 川原 誠司

Psychological Aspects of Students' Life in a High School with a Credit System and No Grade System(2):
Five Case Studies Based on the Results of an Interview Survey

Noriko MITO, Mari KIKUCHI, Seishi KAWAHARA

This is a case study of students' growth processes in a senior high school with a credit system and no grade system.

The credit-system high school has been founded to take in high school dropouts and truants.

In this study, the interviews were used to assess how students' daily school experiences influence the processes and the mechanisms of students' growth.

The findings revealed that the flexible system encourages a huge variety of students to grow up in various manners. Not only those who exercise their autonomy but also those who lack self-direction can make good use of the system and grow up in the high school. As a result, many dropouts and truants are able to return to school.

目 次

- | | |
|--------------------|----------------------------------|
| 1. 高等学校をめぐる諸問題 | 2 Wさん |
| 2. 問題への様々な対応 | 3 Xさん |
| A 中退に対する対応 | 4 Y君 |
| 1 個別的な対応 | 5 Zさん |
| 2 システムとしての対応 | 6. 総合的考察 |
| B 不登校に対する対応 | A 5つの事例から |
| 1 個別的な対応 | B 単位制・無学年制高校のシステムの有効性と課題 |
| 2 システムとしての対応 | 1 中退・不登校経験からの回復 |
| C 単位制高校の位置づけ | 2 主体性の要請についていけない生徒の存在 |
| 3. 単位制高校 | 3 生徒の個別化 |
| 4. 調査の目的と概要 | 4 単位制を高校卒業・大学受験のために合理的に利用する生徒の存在 |
| A 先行研究と本稿の目的 | 5 系統立たない学習 |
| B 調査の概要 | 6 卒業後ギャップ |
| 5. 事例 | 7. 結論 |
| A A高校 | |
| B 一人ひとりの生徒のたどるプロセス | |
| 1 V君 | |

1. 高等学校をめぐる諸問題

近年、わが国の高校進学率は急激に上昇し、戦争直後には40%に満たない程度であったものが、いまや約97%にまで達するようになった。それに伴い、高校に進学する生徒の意識や態度、学習要求は多様化・個性化し、高校に求められる機能も大きく変化してきた(今西, 2000)。このような変化の中で、高等学校教育は様々な問題を抱えるようになり、1970年代には、行政レベルでも高校教育改革の必要性が叫ばれはじめることとなった¹⁾。1984年には、臨時教育審議会が設置され、不本意入学や中途退学の増加に対処するべくいくつかの改革案が提案された。さらに、1991年の中央教育審議会答申においては、高校教育は、画一的な教育、受験競争の激化、不本意入学・中途退学(以下、中退と略す)の激化などといった問題に直面しているとの指摘がなされ、諸制度を改革するための具体的な方策が提言された²⁾。

これらの高校教育をめぐる様々な問題の中でも、年間約8万人にも及ぶ中退者の存在は、高等学校にひそむ構造的な問題を示唆するものとして、特に大きく取り上げられてきた。たとえば、文部科学省は、1980年以降、毎年高校中退者についての全国実態調査を実施している。この調査によれば、2004年度1年間の中退者数は77,897人、中退率は2.1%であった(文部科学省『生徒指導上の諸問題の現状について』)。中退者数・中退率ともに、2001年度の104,894人、2.6%から、2002年度の89,409人、2.3%、2003年度の81,799人、2.2%、2004年度の77,897人、2.1%と3年連続で減少してきてはいるものの、年間約8万人にも及ぶ高校中退者の中には、高校という場からいきなり社会に放り出され、仕事にも他の学校にも居場所を見出せないまま漂流してしまう若者たちもいる。積極的な進路変更、あるいは経済的な理由などやむを得ない事情で中退し就職する者がいる一方で、高校生活に意味を見失って中退し、居場所を失い社会からも学校からも孤立する若者も存在することは看過できない。また、藤田(1988)が指摘するように、2%強の生徒がドロップアウトするという実態は、高等学校のシステムそのものに構造的な問題がないかどうかを検討する十分な根拠となりうるだろう。すなわち、中退という問題は、戦後、高校全入運動を経て進学率の拡大を遂げてきた高等学校教育のあり方を、その根幹から揺るがしているとも言えるのである。

さらには、高校進学率の上昇に伴い、従来は主に義務教育段階の課題として捉えられてきた不登校が、高校においても問題視されるようになってきた。これまで文部科学省は、毎年、「学校基本調査」や「生徒指導上の諸問題の現状について」などにおいて不登校に関する調査を実施してきたが、これらはいずれも義務教育段階についてのみのものであった。しかし、2003年度の不登校問題に関する調査研究協力者会議による報告『今後の不登校への対応の在り方について』の中では、「高等学校進学率が97%に達する現状においては、高校における長期欠席の実態があることを認識することは、高等学校における生徒の不適應への対応を図る観点からも、また、中学校時に不登校であった生徒のその後の支援を考える観点からも重要である。高等学校における不適應への対策を検討するために、まずは、高等学校における長期欠席の実態を把握することが今後必要であると考えられる」ことが指摘され、2005年4月には、全国の国・公・私立高校生を対象として、高校教育段階における不登校の実態調査が行われた³⁾。高校においても、不登校はきわめて大きな問題であるとの認識が広まってきたといえよう。

これら、高校における重大な問題として取り上げられる不登校と中退とは、非常に密接な関係をもっている。たとえば、文科省も先の文書の中で指摘しているが、中退者の中には、不登校を続けている生徒の中で高校に復帰できなかった者が含まれている⁴⁾。また、彼(彼女)らが高校をやめる理由も、「もともと学校生活に熱意がない」「授業に興味がない」「人間関係がうまく保てない」「学校の雰囲気があわない」などといった学校生活・学業不適應が、問題行動、経済的な理由や家庭の事情、進路変更などに比してもっとも多くなっているが、このような理由で高校を去る生徒の中には、在学中に不登校に陥っている者も少なくないと思われる。中退と不登校とは密接な関わりをもった現象であり、どちらも高校教育にとってきわめて深刻な問題となっているのである。

2. 問題への様々な対応

本稿で取り上げる単位制・無学年制高校は、上述したような中退や不登校といった問題の深刻化を背景として、中退者・不登校生の受け皿としての機能を期待され創設された高校である。この高校の概要について述べる前に、まずは、高校教育段階において、これまで中退や不登校といった問題に対してどのような対応

が行われてきたのかについて若干のレビューを試みたい。その上で、単位制・無学年制高校という新たなシステムを擁する高校の導入が、現在行われている様々な対応の中でどのように位置づけられ、どういった新しい意味をもつのかについて整理しようと思う。

そこで、中退や不登校といった問題に対して、これまで行われてきた対応を、①問題への対応を担う主体が、たとえば教師などといった学内援助資源であるのか、それとも民間の医療機関やフリースクールなどのような学外援助資源であるのか、また、②働きかける主体が個人であるのか、それともシステムとして組織化されているのかといった観点から分類し、整理すると以下ようになる。

A 中退に対する対応

1 個別的な対応

a 学内の援助資源による対応

中退者を多く抱えた学校では、問題に取り組もうとすると、教師、とりわけ担任にかかる負担が非常に大きくなる(国民教育研究所, 1989)。担任教師たちは、中退をくいとめるため、日々、膨大なエネルギーを投入して様々な実践を行っている。たとえば、中退の危機に陥った生徒に対して、担任が家庭訪問や丁寧な進路指導を行う中で、中退を思いとどまらせたり、中退には至ったものの、高校を離れる前に中退後の進路や生活の見通しを立てることを支援するというような対応が、多くの高校で積み重ねられてきた(たとえば、五十嵐(1991)など)。

また、養護教諭や生徒指導担当の教師、その他の教師による対応も行われている。教師以外の学内の援助資源の主だったものとしては、スクールカウンセラー(以後、SCと略す)が挙げられよう。1995年から始まった文部科学省のスクールカウンセラー事業によるSCの配置は、中学校にもっとも重点が置かれているため、高校においてははまだSCが配置されていない学校も少なくない。しかし、早くからSCを導入している私立高校やSCが配置された公立高校などでは、SCが、中退を希望している生徒あるいは中退の危機に陥っている生徒に対して個人面接という形で話をきいたり、保護者や担任教師との面接を行っている。

b 学外の援助資源による対応

中退をしようとしている生徒、あるいは中退後の若者が、心身の不調を訴えて民間の医療機関を受診したり、悩みを抱えて民間の相談機関に来談することもある。たとえば、民間の相談機関では、中退を考えてい

る若者や中退してしまった若者の話をじっくりと聴きながら、その人なりの進路や将来への展望を築き上げていく作業を援助するなどの対応を行っている。また、高校中退後にひきこもってしまう若者も少なくないと思われるが、民間にはそういった若者の治療にあたる医療機関や彼らの相談を受ける相談機関が存在する。ひきこもりの若者に対しては、中退をしていなければ学校が責任をもって彼(彼女)らに対して働きかける主体となりうるが、学校を離れてしまえば彼らに対して責任のある大人は家族だけとなる。たとえ「中退」そのものが主訴にならずとも、中退後にひきこもってしまった若者に対して行われる働きかけは中退問題への対応の一つといえるだろう。

2 システムとしての対応

中退への対応には、上述のような、中退しようとする生徒が出現した時に、一人の主体が個別的に働きかける対応の他に、中退問題を学校システムの問題として捉え、新たなプログラムづくりやシステム構築によって、中退したいと考える生徒の再考を促したり、中退の気持ちが生じる要因の予防を目指すような取り組みもある。

a 学内システムの構築

学校では、それぞれの教師が単独に対応するばかりでなく、担任、養護教諭、学年主任を中心とした教師集団が協力し、友人からの働きかけを引き出したり、生徒と家族との関係を調整するといった働きかけも行われている(たとえば、児島・西田・真鍋(2001)など)。また、SCが生徒の担任に対してコンサルテーションを実施するなどの働きかけも実施されている。たとえば、竹内(1998)は、SCとして、担任や保護者と連携をとりながら、退学を希望する生徒本人にかかわった事例を報告している。また、教師との関係がもつれたために、普通科から定時制高校への転学を決意した生徒の担任に対してSCがコンサルテーションを行い、それを受けた担任が熱心に働きかけた結果、生徒が登校を再開した、というケースも、SCによる中退問題への働きかけといえるだろう(和田, 1999)。

こうした教師間の連携の他、学内にシステムをつくることで中退問題に対応しようとする働きかけも行われている。たとえば、①各学期の終わり、特に1学期の終わりに中退者が多いこと、②退学の1ヶ月前に中退者は、出席すべき日数の半分を欠席していることを見出したある私立女子高校が、①指導の記録を充実させる、②担任が欠席や遅刻に焦点を当てて学級の現状を自己点検する、③生徒指導部と学級担任の協力体制

を確立する、などの方策により中退者を減少させたという取り組みなどがある(清水, 2001)。

また、中退を防止する試みに加え、中退をした後の、行き場を失くしてしまった若者を受け入れるような学校づくりも行われている。1988年に、全国にさきがけて高校中退者の受け入れをはじめた北星学園余市高等学校は、そのような実践を行っている代表的な高校といえよう。本稿で取り上げる単位制高校も、中退者の受け皿としての機能を期待されて創設された学校であり、中退が起こってしまった後の事後的な対応に取り組んでいる。しかし、どちらの高校も、中退経験者が再び退学してってしまうという事態に直面し、彼(彼女)らが安心して通える高校を保障するために、「生徒が能動的に参加し学ぼうという意欲の湧くような授業づくり」「家庭や地域と連携した教育体制づくり」など、さまざまな改革に着手している(深谷, 1991)。これらの試みは、中退者を出さないための授業づくり・学校づくりであり、中退という問題への予防的・開発的な働きかけである。すなわち、高校中退者を受け入れている学校は、事後的な対応と同時に、日々、再び中退を発生させないような予防的な対応も行っているのである。

このような予防的な対応には、他に、高校中退の一因となっている学業不振に対処するため「わかり易い授業、魅力ある授業づくり」を行う(たとえば新潟県立水原高等学校, 1998)、「入学してよかったと言える学校づくり」を実践する(長野県立梓川高等学校, 1998)などの取り組みも挙げられる。ただし、ここに挙げた対応はほんの一例にしか過ぎず、中退を予防するための教師の授業実践、学校を挙げての懸命な試みは、日々、数多くの高校で積み重ねられているものと思われる。

b 学外の機関との連携システムの構築

校内だけでなく、学外の機関との連携システムをつくることによって、中退問題に対応しようという試みも行われている。

学年別に中退する生徒数を比較した時、他のどの学年よりも1年次において中退する生徒が一番多いという現象は、全日制普通科、全日制専門学科、全日制総合学科、定時制の別を問わない⁵⁾。このような事実に対し、高校1年次というあまりにも早い時期に高校を離れていく生徒たちについては、中学校の進路指導などにも問題の一端があるのではないかという反省に立ち、高校へ進学していった生徒たちの中退を防止する働きかけを行う中学校もある。国民教育研究所『高校中退問題資料』(1989)では、高校と、生徒を高校に送

り出した中学校との連携による取り組みが報告されている。この事例の高校は、生徒の出身中学校との連絡会を緊密に行い、中退の危ぶまれる生徒を早期に知らせている。そして、その報告を受けた中学校では、旧担任が、中退を未然に防ぐためにその生徒の自宅を家庭訪問し、退学を思いとどまるよう説得するなどの働きかけを行っている。

教育委員会や教育センターの教育相談室など公的な相談機関や民間の相談機関が、中退しようとする生徒や中退してしまった若者の不安や葛藤に寄り添い、その後の進路の相談に応じる例も多数見受けられる。たとえば、岡山県の教育委員会は、教育相談窓口でカウンセリングを行うだけでなく、中退者が適切な進路選択をするのを支援するため、進路相談窓口を新たに開設し、専任の相談員が悩み事の相談に応じたり進路に関する具体的な情報提供にあたるなどの活動を行っている⁶⁾。また、教育委員会主導のもと、さまざまな機関が連携しているような地域もある。たとえば、大阪府高槻市では、1986年現在、教育委員会、学校、教職員組合が連携し、中学校教師による卒業生の追指導が実施されているとの報告がなされている(新海・新田, 1986)。

中学校では、こうした働きかけの他、より予防的な施策も行われている。高校中退については、文部科学省も中学校における進路指導の改善・充実を図る必要性を打ち出しているが⁷⁾、高校中退の一因に、中学校における進路指導の不備があると考え、中学生の段階で、生徒たちに、高校進学のための目的や高校生活への見通し、将来への展望をもたせるような働きかけを実施している中学校もある。

上記のような連携システムの構築は、中学校と高校の間だけで行われているわけではない。中退者を数多く受け入れている通信制高校と提携している民間のサポート校なども、高校と連携して、生徒が途中でドロップアウトすることなく通信制高校を修了するためのさまざまな働きかけを行っている。このように、高校の外にある機関と高校とが、中退しようとしている生徒を早期発見・予防するために、新たなシステムを構築するという働きかけも行われている。

B 不登校に対する対応

1 個別的な対応

a 学内の援助資源による対応

文部科学省が発表した平成16年度の不登校に関する調査結果を見ると、不登校児童生徒のうち26.4%の生

徒が年度内に登校するようになっており、22.5%が「登校には至らないものの好ましい変化が見られるようになった」との報告がなされている⁸⁾。これは小・中学校のデータであるが、高校における不登校は中学校の不登校と連続性が高く⁹⁾、高校においても同様の働きかけは行われているものと考えられる。この報告によれば、学校の対応措置の中で特に効果があつた働きかけとして、「家庭訪問を行い、学業や生活面での相談にのるなど様々な指導・援助を行う」「保護者の協力を求めて、家族関係や家庭生活の改善を図る」「登校を促すため電話をかけたたり家まで迎えにいく」などの措置が挙げられている。こうした働きかけは、主に担任あるいはSCによって実施されているものと思われる。また、生徒と体の不調について話しながら、こころの話を聴くという養護教諭ならではの働きかけも、学内の援助資源による個別的な対応の一つと言える。

b 学外の援助資源による対応

不登校生徒への対応においては、病院やクリニックなどの医療機関、あるいは公立の相談機関や民間の相談センター・相談室などといった外部機関との連携も行われている。医療機関における不登校生徒への対応についてはこれまで数多く紹介されており、たとえば堤(1999)は、大学病院の精神科における家庭内暴力を伴う不登校の高校2年生の男子生徒への治療の中で、生徒本人が学校を中退し大検受験の決意を固める過程を援助した事例を示している。また、公立の相談教育機関においても、不登校生徒の面接だけでなく、保護者面接を平行しながらの援助等が行われている(たとえば、酒井, 2005)。

民間の相談センター・相談室の中には、土日でも利用できるところがあり、不登校生徒に対する直接的なサポートや保護者の相談等において柔軟な対応を行っている。さらに、民間には、不登校の生徒のための電話による相談「電話ホットライン」等、多彩な施設が数多く登場してきている(本間, 2005)。

2 システムとしての対応

a 学内システムの構築

文部科学省の調査によれば、学校が行う指導の改善策や工夫には、「不登校の問題について、研修会や事例研究会を通じて全教師の共通理解を図った」「全ての教師が不登校生徒に触れ合いを多くするなどして学校全体で指導にあたった」などの働きかけがある¹⁰⁾。これらは、公立の小・中学校を対象とした調査であるが、高校においても、このような学校全体としての取り組みは行われているであろうと思われる。

また、学校の中に不登校生徒の居場所をつくらうとする試みも、学校内におけるシステムとしての対応といえよう。不登校の生徒たちが、学校の中にありながら学校とは違う雰囲気の居場所(カウンセリಂಗールームや保健室など)に通う、別室登校あるいは保健室登校と称される試みは、現在、多くの学校で行われている。別室登校・保健室登校は、学校に来ない、あるいは来られない不登校の生徒のための居場所を、学校内に確保するものである。しかし、別室登校・保健室登校の実践の意味は、これだけにとどまらない。たとえば、木南(2005)は、SCとしての実践の中で、別室登校が「単なる居場所の確保に留まらず、生徒同士が触れ合い、ぶつかり合う中での“育ち合いの場”(社会性を身につけ、磨く場)として機能する」ことを意図している。こうした実践の中で、別室登校・保健室登校は、不登校生徒たちの成長を促す場としての機能をも果たすことが示されている。

さらに、学校内のある一室に不登校生徒の居場所をつくる別室登校・保健室登校といった対応とは異なり、学校そのものが不登校を経験してきた生徒たちの居場所となるような学校システムを構築する試みも行われている。本稿で取り上げる単位制高校は、中学校で不登校を繰り返してきた若者を積極的に引き受けようという意図のもと(菊地, 1996b)、従来の高校に比して柔軟なシステムをもつものとして設立された高校であり、そうした学校づくりの一例といえる。その他、不登校生徒の親の会が中心になって設立され、不登校経験のある生徒を中心に、教育とカウンセリングを統合した教育実践を行っている兵庫県生野高校(相馬・花井・倉淵, 1998)も、このカテゴリーに当てはまると考えられる。

また、個々の教師レベルあるいは学年、学校レベルで、授業方法の改善や授業をわかりやすくする工夫など、不登校を出さないような魅力的な授業づくりや学校づくりの試みも行われている。

b 学外の機関との連携システムの構築

学校に行けない「不登校」の状態が問題になっている場合、学校という存在を全く切り離して対応することはできないと考える学外の相談機関は少なくない(酒井, 2005)。学校と連携している学外の機関には、まず、学校への復帰を支援するための組織として位置づけられ、各市町村や各都道府県が設置している教育支援センター(適応指導教室)が挙げられる。適応指導教室は、「学校以外に設置している施設、または、学校の余裕教室などを利用して校内に設置しているもので、

児童生徒の在籍校と連絡をとりつつ、個別カウンセリング、集団での活動、教科指導などを行うもので、教育相談室のような単に相談を行うだけの施設は含まない」(文部科学省)施設である。主として小・中学生を対象としているところが多いが、たとえば鳥取県教育研修センター「はまなす教室」のように、入級対象が小中学生のみならず、高校生をも含んでいる適応指導教室も存在する。しかし、小・中学生とは異なり、高校生は適応指導教室への通級が原籍校での出席日数としてカウントされるということがないため、実際の入級は少ないようである(相馬・花井・倉淵, 1998)。

このような事情は、民間のフリースクール、フリースペースにおいても同様であろうと思われる。小・中の義務教育期間は、在籍校の校長の許可があれば、フリースクール、フリースペースへの出席は原籍校の出席日数に数えられる。しかし、義務教育ではない高校はその範疇にはない。小・中学生と高校生にとってのフリースクール、フリースペースの意味合いは、同じ不登校生徒であっても全く異なるのである。そのため、高校で不登校の状態にある生徒がフリースクール等に入ることは義務教育年齢の子どもに比べて少ない。入るとしても、通信制高校に通いながら、あるいは大検合格を目指しながら在籍する生徒が大多数のようである。

C 単位制高校の位置づけ

これまでに行われてきた対応を概観すると、高校教育段階における中退問題への対応には、中退しようとしている生徒への働きかけや、中退の発生そのものへの予防的な取り組みに比して、中退後の若者に対する対応のバリエーションが少ないという特徴があるように思われる。これは、中退してしまった若者に対して、働きかけることのできる主体や場所がそもそも限られてしまうためではないかと推測される。中退後、他の高校に転・編入学する者については、中退者を受け入れている学校が受け皿としての機能を果たし、その後も働きかけてゆくことができるが、学校にも社会にもどこにも行き場をもたない若者に対しては、働きかけること自体が非常に難しくなってしまうのである。

また、高校における不登校については、不登校に陥った生徒に対する働きかけや予防策なども様々に行われているが、義務教育機関における不登校ほどのサポート体制が整っていないのが現状である。小・中学生は、適応指導教室や民間のフリースクールに通級すれば原籍校での出席としてカウントされる。また、現在進行中の義務教育制度の改革においては、一定の条件付き

で、いわゆるフリースクール等の教育機会も義務教育として認めるような方向も考えるべきとの方針が打ち出され、検討され始めている。これが実現すれば、不登校の小・中学生にとって、さらに公的に認可された居場所のバリエーションが増えることになるだろう。しかし、高校生に対してはそのような保障はない。つまり、不登校に陥った高校生は、様々な働きかけにもかかわらず長期的に不登校の状態が継続した場合、多くは中退という選択肢を取らざるをえなくなる。そして、その後、彼(彼女)らに働きかける方策はやはりあまり多様ではない。

こうした状況の中、中退者・不登校経験者の受け皿としての機能を果たしている高校の一つに単位制高校がある。中退後、仕事に就くことを選ばずに、フリースクールやフリースペースなど民間の機関に通う若者たちは、通信制高校に在籍しながらそのサポートを求めているたり、大検合格のためのサポートとそれまでの居場所を求めていることが多い。中退者の受け皿となるような公的な機関は実はそれ程多様ではないため、彼らは、民間の機関に通いながら、高校生や大学生などといった公的な「身分」の回復を目指している。公的な機関としては、通信制・定時制高校やいくつかの普通高校などで中退者を受け入れているが、本来は中退者受け入れが目的ではないため、中には、たとえ編入しても既に前籍校で取得した単位の一部を再び取り直さなくてはならない等の様々なハードルのある場合もある。すなわち、中退者が転・編入学しやすい柔軟なシステムをもち、不登校を経験してきた生徒も数多く受け入れている単位制高校は、中退者や不登校生徒たちに対し公的な機関としての受け皿を提供している点で、きわめて重要な役割を果たしているといえよう。

それでは、そうした機能をもつ単位制高校とはどのような高校なのであろうか。次に、単位制高校について、その設立までの経緯と概要を述べたいと思う。

3. 単位制高校

単位制高校とは、「学年による教育課程の区分を設けず、決められた単位を修得すれば卒業が認められる高校」(文部科学省)である。この高校は、高校教育改革の流れの中でその構想が示された「新しいタイプの高校」の一つである。単位制について、国家レベルで本格的に議論されはじめたのは、1970年代半ばのことである(菊地, 1996a)。以後、単位制を要望する機運が徐々に高まる中、1985年には、臨時教育審議会の第

一次答申において、生涯学習という改革理念に基づき、単位制高校の設立が提案された。そこでは、「学習者の希望、学習歴、生活環境などに応じて高校の教育が容易に受けられるようにするため、個別的に教科・科目の単位の取得の認定を行うとともに、単位の累積加算により卒業資格の認定を行う機能をもつ新しいタイプの高校(単位制高等学校)を設置できるようにする」¹¹⁾と述べられている。これを受けた1987年の臨時教育審議会答申において、教育改革の骨子として、「個性重視」「選択の機会の拡大」などの方向性が示された。そして、その一貫として、後期中等教育の構造を柔軟化する必要性が認められ、単位制高等学校の設置、高等学校の修業年限の弾力化などの方策の検討が提言されたのである。単位制高校の基本的なあり方については、文部省内に設置された「中等教育の推進に関する調査研究協力者会議」によって、①生涯学習の観点から、誰でも適時、必要に応じて高等学校教育を受けられるようにすること、②学年制をとらず単位のみによる履修形態をとること、また、学習対象者としては、①何らかの理由で高校教育を受けられなかった成人、②新規中卒で単位制を希望する者、③卒業を目的とせず、一部科目の履修を希望する者、④既高卒者でも再教育を希望する者、が想定された(町井, 1995)¹²⁾。

これらの政策を汲んで、1988年には学校教育法施行規則の一部改正により単位制高校教育規定が定められ、法的な整備が行われた。そして、この年、定時制・通信制課程において3つの高校が単位制高校へと改編されたのである。さらに、1993年には全日制課程においても単位制高校が設置されるようになった。

上述したように、当初は、生涯教育という観点が強調されていた単位制高校だったが、1991年の中央教育審議会答申では、中途退学者も単位制高校の対象者とされている。すなわち、不登校・中途退学者が急増する中で、単位制高校は、中退者の受け皿として期待されるようになっていったのである。

4. 調査の目的と概要

A 先行研究と本稿の目的

単位制が制度化された当初の研究には、始まったばかりの単位制高校の実践について、教育課程や履修形態などを調査することによって、その新たな教育の試みを評価しようとするものが多く見られる。たとえば、菊地(1993)は、ある単位制高校3校を調査した結果、それらの単位制高校においては、柔軟なシステムと教

員加配、きめこまやかな個別指導とによって、「登校拒否傾向の生徒の約半数が“回復”に向かった」と述べている。

また、菊地(1994)は、ある単位制高校を調査し、教員の数や履修形態、教育課程、履修指導の仕方、また、校則や在籍年数などといった面での新たな制度が、生徒に対して、①自分自身のペースで履修を行えることと、②ホームルームを中心とした活動の比重が比較的小さく、学校空間に縛り付けない自由さを保障し、不登校経験者の「治療」をもたらしたことを示している。しかし、同時に、「自由」の代償として、思うように単位取得の進まない生徒の存在、勤務形態の異なる教師集団の連携・協力の難しさなどといった課題をも指摘している。

さらに、町井(1995)は、ある単位制高校における学校側への聞き取りと教師との懇談を行い、単位制高校が入試選抜方法において検査得点やそれ以外の基準を多様に組み合わせた、従来の選抜方法と一線を画す基準を採択することにより、これまでの画一化・硬直化した公立高校とは異なるシステムや自由な選択を可能とする教育内容を実現していること、しかし一方で、一部の生徒が単位制を受験勉強に効率的に活用する恐れのあること、また教師の意識改革が大きな課題であることなどを指摘している。

横尾(1997)は、ある単位制高校をとりあげ、卒業の要件、大検の単位認定、在籍期限、学校行事等の特別活動の実態を調査し、単位制高校では集団指導が成り立ちにくく人間関係が希薄になりやすいこと、単位の履修が生徒の自主性に任されているため、単位を修得できない者が滞留していること、等を問題点として指摘している。そして、「高校教育改革は、制度だけでなく、教育内容と指導の方法、教育活動にたずさわる教職員の意識の改革が総合的になされなくてはならないが、現在のところ、単位制高校の指導内容・方法に対する研究不足から、制度の改革のみが強調されている」傾向があると述べている。

上述してきた研究のように、これまで、単位制高校の制度面に着目し、このような高校の導入がいかなる帰結をもたらしているのかを探求する研究が数多く行われてきた。一方で、生徒の側の単位制高校での学校生活に対する意識や意味づけに着目した研究もいくつか行われている。

たとえば、菊地(1996a)は、既存の定時制高校を再編したある一つの単位制高校において、生徒6名と教務主任に対する面接調査を実施し、現在行われている

高校教育改革の理念が単位制高校の中で実現されているかどうかについて調査した。その結果、「ヤンキー」や「不登校経験者」など、現代の教育システムからさまざまな形で「排除」されてきた生徒たちを受け入れている単位制高校において、その中にいる教員もまた「排除」に加担するような既存の社会秩序を維持するメンタリティをもっていることを指摘している。すなわち、単位制高校においても、「既成の社会秩序が維持されており、高校の階層化や高等教育機関の機能分化などといった社会や教育の仕組みを突き崩すには至っていない」¹³⁾というのである。

また、岡部(2004)は、従来の単位制高校に関する先行研究が、制度的枠組みや、カリキュラム編成者側の教育意図および単位制の運用方法に関するものが中心であり、単位制のカリキュラムが生徒の学習経験にどのような影響を及ぼしているのかを看過してきたことを指摘し、ある単位制高校におけるカリキュラムに対する生徒の主観的な意味付与について検討した。その結果、多くの生徒は、日常的には単位取得という比較的短期的な展望に基づいて自らの学習活動を方向付ける傾向にあり、実際に単位を集積し、高校卒業資格取得の目処が立った生徒の中には、その結果として大学進学その他の進路を目指そうとする傾向が生じることを指摘している。すなわち、当該単位制高校では、「卒業後の進路に向けての準備教育機関としての側面よりも、高校卒業資格付与機関としての側面がより重視されており、これまでの高等学校の準備教育機関としてのあり方が揺らいでいる」というのである。

さらに、川井・中田(2000)は、5つの単位制高校において、学校要覧や学校規模、卒業生の進路状況、生徒の年齢や男女構成、保護者の職業、教育課程などを調査するとともに、生徒を対象としたアンケートを実施し、生徒側の意識の実態を調査した。その結果、①調査対象校となった単位制高校は、大学受験という進路指導的な側面などから制約を受け、自由な選択が必ずしも実現していないこと、②逆に制約の少ない学校では生徒の連帯感・帰属意識が希薄になっている傾向がみられること、③生徒たちは、学校を、必要単位を修得する合理的な機関にしてしまいがちであること、などが見出された。

このように、従来の研究では、単位制独自の新たな制度だけでなく、単位制高校の中で過ごす生徒たちの側の意識に焦点を当てた探求が行われてきた。しかしながら、これらの研究は単位制高校の生徒たちの一般的傾向を指摘するにとどまっており、単位制高校入学

までに多様な経験をしてきている一人ひとりの生徒の学校経験に着目した研究は行われていない。また、単位制高校が中退や不登校を経験してきた生徒たちの受け皿となることを期待されているにもかかわらず、彼(彼女)らが単位制高校の中でどのような学校生活を過ごし、単位制独自のシステムやカリキュラムをいかに経験し、中退や不登校といった経験をどのように乗り越えていくか(あるいは乗り越えられないのか)、という点に着目した研究も行われていない。高校教育において、中退・不登校はきわめて大きな問題であり、これらの経験をもつ生徒たちにとって単位制高校がどのような場所となっているのかを調査することは、単位制高校独自のシステムの効果を検討する上で欠くことのできない重要な作業であろうと思われる。

筆者らがこれまでにに行った研究¹⁴⁾においては、質問紙調査により、生徒たちが自由なシステムをもつ単位制高校をどのように経験しているかということについて、できる限り広範囲の生徒たちの実態を数量的に把握しようと試みた。その結果、生徒たちにとって、A高校の自由なシステムを積極的に活用できるか否かということが非常に重要であり、活用できた生徒は卒業後のA高校に対する満足度が高まるという結果が見出された。この研究においては、A高校生徒の学校経験の実態を大規模に把握することができたが、しかし、一人ひとりの生徒がA高校の中でどのような経験をし、いかなるプロセスを経て、A高校での経験を評価するにいたるのかということまでは十分に把握できなかった。

そこで、この研究に続く位置づけとなる本稿では、中退者・不登校経験者を含むA高校の生徒たち一人ひとりに焦点を当て、A高校の自由なシステムの中で彼らがどのような経験をしながら成長していくか(あるいは成長を妨げられるか)、というプロセスを詳細に描き出すことを目的とする。そのため、調査方法として面接調査を用い、学校システムや教師や友人との相互作用の過程、あるいは授業など日々の教育実践の中で生成される過程を個別的に把握することを試みた。本稿では、このような調査から得られたデータを用いて生徒たち一人ひとりの事例を呈示することにより、単位制高校が彼(彼女)らにもたらしている効果を明らかにしたいと思う。さらに、その結果を踏まえた上で、面接調査全体から感じられたことをまとめて呈示する。

B 調査の概要

調査においては、質問紙調査では接近することので

きない一人ひとりの生徒の葛藤経験や中退・不登校経験からの回復プロセスを緻密に浮き彫りにすることを試みた。そのため、具体的な調査方法として面接調査を用いることとした。調査対象校としては、首都圏P県に位置する単位制高校であるA高校を選定した。調査対象者は、2000年8月に、1991年から2000年3月までにA高校に在籍経験のあった者2,044名を対象として実施した質問紙調査¹⁵⁾への回答が得られた330名(男性118名、女性209名、不明3名)のうち、筆者らの面接調査依頼に対して承諾の得られた44名(男子14名、女子30名)であった。調査の時期は2002年5月～6月、場所はA高校内にあるガイダンス・ルームであった。なお、インタビューの時間は1人につき約1時間、インタビューの内容は調査対象者の許可を得た上でテープに記録した。

面接調査では、質問紙調査では把握することのできない一人ひとりの生徒の具体的な学校体験(居心地の良さ・悪さ、悩み、解放感など)や、友人との関係、教師との関係などの対人関係について詳細に尋ねた。質問内容は、大きく、①入学前、②在学中、③卒業・中退・転学後の3期に分けられる。

①については、

- ・不登校経験などを含めた中学校時代の経験
- ・他校中退の経験(中退者に対して)
- ・A高校のどこに惹かれ、どのような期待を抱いていたか

②については、

- 年を追うごとの高校生活の変化を、
- ・カリキュラムや学校のシステム、そこから派生する学校の雰囲気への適応
- ・友人との関係や教師-生徒関係
- ・学校行事への参加の度合い
- ・アルバイトなどの課外活動

③については、

- ・現在の自分から見た、A高校で過ごした高校生活の意味づけや評価

について尋ねた。

5. 事例

まずは、ここで取り上げるA高校について、同校の『学校要覧』や加勇田(1997)、飯島(2000)など既刊の文献を参考にその概要を述べた後、面接調査の対象者の中から5名を選定し、A高校入学前から卒業・中退・転学後までの彼(彼女)らの経験について詳述したいと

思う。

A A高校

本稿で取り上げるA高校は、首都圏に位置するP県初の単位制高校として、1991年4月に設立された。そのシステムの最も大きな特徴は、「単位制」と「無学年制」である。単位制、学年制とは、進級や単位を認定する方式の一つである。単位制は、学年による教育課程の区分を設けないシステムであり、生徒は決められた単位を修得すれば進級・卒業が認められる。一方の学年制では、教育課程を学年によって区分して、学年ごとに課程の修了を認定し、進級の可否についての判定を行う。本来、高校では、単位制と学年制が併用されているのだが、実際には、ほとんどの高校において学年制が偏重され、多くの科目が必修科目とされてきた。このような状況下では、生徒たちは、わずかに単位数が不足しただけでも次の学年への進級が認められずに原級措置となってしまふ。そして、原級措置となった場合には、据え置かれた学年において、未修得の科目だけでなく既に修得済みの科目をも再び履修しなければならなくなるのである。1991年の中教審答申では、このような硬直的なシステムの問題が多数の中途退学者を生み出す要因の一つとなっていることが指摘され、必修科目の取得や進級単位数にとらわれない弾力的なシステムである単位制のさらなる活用が提言された¹⁶⁾。しかし、これまでに行われてきた調査の中でも指摘されているように、単位制課程をもつ高校の多くは、学年制との併用というシステムを採っており、本研究で取り上げるA高校のように、無学年制を採用している高校は少ないのが現状である¹⁷⁾。

単位制高校では、他の高校で履修した単位や大検合格科目の単位を加算することができるため、他校を中退してA高校に入学してきた生徒は、3年未満でA高校を卒業することができる。また、生徒が主体的に科目を選択できるよう、約400もの講座を設置している。生徒は、自分で学習計画を立て、それに沿って豊富な開講科目の中から履修する科目を決め、時間割を作成するのである。なお、在学年限は6年であり、ゆっくり学習を進めたい生徒にも対応できる柔軟なシステムとなっている。

学習課程は、普通科1部～4部と情報科2部・4部からなる定時制課程、および通信制課程からなっている(1部は8:45～12:30、2部は10:45～15:00、3部は13:15～17:00、4部は17:25～21:20)。選抜に際しては、「1学年相当」と「2学年相当以上」とに分けて募集する。

「1学年相当」とは、中学校卒業見込みの者・中学校を卒業した者・過去に在籍していた高校での取得単位数が19以下の者のことであり、「2学年相当以上」とは、過去に在籍していた高校での取得単位数が20以上の者のことである。2学年相当以上の枠で入学してくる生徒はその大部分が中退者であり、1学年相当の中にも、少数、中退者が存在する。そのため、A高校では、他の高校を中退してきた生徒が全体の約7割強～8割を占め、中学校卒業後直に入学してくる生徒は3割に満たない。

このようにして入学してくる生徒の学力水準は「都立高校の中の上レベル」であり、A高校の調査によれば、入学者の3/4は進学を希望し、特に4年制大学進学希望が全体の約4割を占めるといふ。A高校は、比較的学力水準の高い単位制高校であると言えるだろう。菊地(1993)は、個々の単位制高校の成果は、抱えている生徒の実態によって大きく異なることを指摘している。すなわち、「学校的な人間関係や学校的な空間にはそぐわないが、受験勉強には積極的な生徒」を多く抱えている場合と、「他の高校の受験に失敗したり、他に行く高校がなく不本意に入学した生徒」が大半を占める学校とでは状況が全く異なるという。そういった意味では、進学希望者の多いA高校は前者のタイプにあてはまるのではないと思われる。

選抜の基準は、「1学年相当」が調査書・学力検査(国語、数学、英語)・面接、「2学年相当以上」が成績証明書・学力検査(国語I、数学I、英語I)・面接であり、調査書よりも学力検査に重点が置かれている。これは、不登校生徒がA高校を志望する大きな理由の一つとなっている。また、学力検査の科目数が3教科と少ないことも、学習が遅れがちである不登校生徒にとっては魅力の一つであるようだ。そのため、A高校には不登校を経験した生徒が多数在籍している(われわれの実施した質問紙調査¹⁸⁾の結果では49.4%)。

このような特徴をもつA高校では、教育相談活動が充実しており、3人の専任カウンセラー(教員)を置いた相談室を設置している。相談室の1年間の個別相談件数は、延べ1000件を超える。

A高校では、クラス専用の教室がなく、日々のホームルームは行われない。毎時間、生徒は各自が取っている授業の開講される教室へ移動するため、必修科目が多く同じ授業を取る多くの1学年相当以外の生徒たちは、一日中同じクラスの生徒の誰とも顔を合わせないこともある。それゆえ、A高校の中で、休憩時間を過ごす場所や親しい友人を見つけるのに戸惑いを

感じたり苦勞したりする生徒も多い。2学年相当以上の生徒の中には、卒業後数年経つと「同じクラスの人の顔や名前は全然覚えていない」という人もいるほどである。

A高校では、成人している生徒もいる幅広い年齢層の生徒集団を指導しなければならないため、校則が存在せず、「法律に定められている基本的なことを守る」以外のルールはない。生徒は、時間割を作成するだけでなく、単位取得に必要な出席日数や欠時数をも自分で管理しなければならない。また、制服もなく、学校行事なども最小限しか行われない。文化祭や体育祭は希望者のみで実施するため、参加しない生徒も多い。隔年実施の修学旅行も全校アンケートを採り、希望者が定数を超えないと催行されない。実際、希望者が少なく、修学旅行に行かなかった年もあったという。不登校の経験があったり、既存の学校という枠組みに適応できずにA高校にやってきた生徒たちは、集団活動に苦手意識や抵抗感をもつ者が多い。そのため、「自由」を標榜するA高校では集団での取り組みを可能な限り削減しているのである。

上述してきたようなA高校の雰囲気、ある卒業生は「ホテルのロビーのようだ」と表現する。同じ屋根の下に泊まる客が集まってザワザワとしているが互いに関わりあうことはなく、それぞれが別々の目的を持っているがたまたま同じ空間で同じ時間を過ごすロビーのようだ。実際、校舎に一歩足を踏み入れると、筆者らの知るごくありふれた高校でしばしば見られる、友達同士ではしゃぎあうような賑わいはほとんどなく、一体感のないどこか予備校のような雰囲気が漂う。他に居場所がないのであろうか、階段や渡り廊下にひとりポツンと座り込んで本を読む生徒もいる。時間割によって登校時間が異なるため玄関には始終生徒の出入りがあるが、彼らは顔見知りですらないのか、互いに声を掛け合うような光景はほとんど見られない。こういった「自由」で「個人主義」の雰囲気が強いA高校独自のシステムの中で、生徒たちは、いかなる高校生活を過ごし、何を心得て卒業・中退・転学していくのだろうか。

B 一人ひとりの生徒のたどるプロセス

ここでは、A高校入学前からA高校を何らかの形(卒業・中退・転学)で離れるまでにたどるプロセスがそれぞれ異なる生徒たちの事例を紹介する。事例として挙げる生徒たちは、A高校入学前からA高校卒業までにたどるプロセスを、①A高校入学前の経験であ

る「不登校経験の有無」, ②A 高校入学の経緯である「中退経験の有無」, ③A 高校における「在学年数」と, ④A 高校をどのような形で離れたかという「卒業・中退・転学」の4つの指標で捉えたとき, その組み合わせがそれぞれ異なる者たちを, 面接調査の対象者となった44名の中から選定した。以下では, 彼(彼女)らのA 高校での体験を, 時系列に沿って, a 入学前, b 在学中, c 卒業・中退・転学後の各期に分けて詳述したいと思う。

また, 不登校・中退といった事象は, 生徒にとって非常に重要な“家庭(親)”や“学校(教師)”, そして“本人”という三者が織りなす様々な関係の絡み合いの中で生じている。そこで, 「d 考察」を設け, それぞれの生徒のA 高校入学前から卒業・中退・転学するまでのプロセスを, その三者の関係を軸に整理し直すことを試みた。

なお, 事例として挙げる5名の生徒について, その性別とA 高校入学までの経緯(①不登校経験の有無, ②他校の中退経験の有無), およびA 高校での経験(①在学年数, ②A 高校を卒業したか中退したか転学したか)を以下に示しておく(表1)。

1 V 君

a 入学前

V 君は, A 高校入学前に在籍していた高校に「息が詰まるような感じ」を感じていた。そこは, 授業中に私語が絶えない, 生徒が教師と揉めるなどといったことがしばしば起こる, 荒れ気味の学校であったという。当時, 「学校はこうあるべき」「生徒はこうあるべき」「ちゃんとしなくちゃいけない」という考え方を強くもっていたV 君にとって, そうした雰囲気は許せないものであった。なかなか周囲に溶け込んでいくことができず, 他の生徒たちとの間に壁ができ, 「浮いた存在」

になっていった彼は, 毎朝登校することすら嫌になってしまった。その頃, 新聞の記事でA 高校のことを知り見学に来たところ, 「どんな考えを持っていても許容してくれる自由な高校」であり, 「ここだったら, 自分もやっていけるんじゃないか」と感じたという。後1年で卒業という時期でもあり, 教師からは引き留められ, 両親からも反対されたが, 彼は, それらの反対を押し切って高2の1月に中退, 2月にA 高校を受験した。

自分では, 前の高校は積極的に行こうとは思わなかった。親の言ってることにそれまでは反抗したことなかったんですけど, そのままレールに乗るのに疑問を感じて, 現状から抜け出そうということでA(高校)を選んだ。

しかし, その年の試験には不合格となってしまう。反対を振り切った受験だっただけに, 「親に合わす顔がない」「生きててもしょうがない」というほど落ち込んだV 君であったが, どうしてもA 高校を諦めきれずに, 1年間, 生涯学習講座と一部科目を履修しながらアルバイトをするという生活をした。そうして, 次年度にはA 高校に合格することができた。

b 在学中

A 高校の自由な雰囲気に着かれたV 君であったが, 自由に科目を選択するシステムには戸惑いを感じた。入学当初から大学受験を考えていたが, 大学受験のためにはどういう風に時間割を組めばよいかかわからず, 相談室をたびたび利用し, 非常に苦心して時間割を作ったという。

時間割作成においては, 単に卒業に必要な単位数を揃えるだけにとどまらず, 積極的に色々な授業をとっ

表1 5名の生徒のA 高校入学までの経緯とA 高校での経験

	性別	不登校経験	A 高校入学までの経緯	在学年数	卒業・中退・転学
V 君	男	あり(高2次)	他の高校を2年次に中退	2年	卒業
W さん	女	なし	他の高校を2年次に中退	3年	卒業
X さん	女	なし	1校目を2年次に中退 2校目を1年次に中退 3校目を3年次に中退	1年	卒業
Y 君	男	あり(中3次)	中学卒業後すぐに	3年	中退
Z さん	女	なし	中学卒業後すぐに	3年	卒業

てみた。また、テニス部に入部したり、文化祭の実行委員になったりと意欲的に活動し、その中で交友関係も広がっていった。時間が経ち、そうした友人たちとの関係が深まるにつれ、「親に見放された」「前の学校でいじめられた」などの、人にはなかなか話せない、辛く苦しい体験も互いに打ち明けられるようになっていったという。V君は、友人たちとの深い関わり合いの中で、前籍校での体験や両親との関係の悪化などに苦しんでいるのは自分だけではないことを知った。また、中退したことに対して世間から向けられる否定的なまなざしによる傷つきをも共有することができ、それまでの打ちひしがれた感じから解放され、「自分は変わり者じゃないんだ、これでいいんだ」という大きな安心感を持つことができた。

A高校がなかったら今の自分はなかったんじゃないかと。そういう言い方が大げさじゃないくらいに、自分を肯定的に考えることができるようになったんじゃないですかね。居場所を見つけられて、自分もやっていけるんだという自信を取り戻せたというのがあったんで。

V君は、A高校に入学し、「自分を取り戻すことができた」のだという。

c 卒業後

高校卒業後は、2年間の浪人を経て、4年制大学に入学し卒業している。A高校での「初めて会った人とも仲良くなって色々な話ができる」という体験が原点になり、「知り合いをつくることのできる旅行を手伝いたい」という希望をもつようになったV君は、大学卒業後、ユースホステルでボランティアとして働いてみたところ、非常にやりがいを感じたという。インタビュー時は、とある企業で非常勤職員をしていたが、ゆくゆくは旅行関係の仕事に就きたいと考えているとのことであった。

d 考察

V君は、前籍校では、「学校、学生はこうあるべきだ」という「まじめすぎる狭い考え方」に縛られて、息が詰まるような感じを抱いていた。荒れ気味だったその高校では、彼は、きちんとしていない周りの人たちに許せないと感じており、壁をつくって浮いた存在になっていた。

また、親との関係においては、それまでの彼は反抗したことがなかった。しかし、親の敷いたレールにそ

のまま乗っていくことに疑問を感じ、現状から抜け出そうと、初めて親の意に反して前籍校を中退、A高校に入学した。

A高校に入学したV君は、どんな考え方も受け入れてくれる自由なA高校でのびのびと過ごすことができた。真面目な彼には、がんじがらめに縛られる環境よりは、A高校のように放っておいてくれる環境の方が合っていたという。A高校では、色々な授業を取ってみたり、テニス部に入部したり、文化祭の実行委員になるなどして交友関係を広げ、様々な活動に身を投じることができた。そして、友人たちとの間で、「親に見放された」「ドロップアウトした」などの傷ついた体験を共有するようになっていった。「こんな思いをしたのは自分ひとりじゃない」「周りの人もそうなんだ」という彼らとの連帯感の中で、V君は安心感をもつことができた。両親も、生き生きとA高校に通う彼の姿を見て、彼の決断を理解してくれるようになったという。そして、打ちひしがれた状態から立ち直り、自分自身を肯定的に捉えることができるようになっていった。

青年期という、親から自立し、ものごとを自分の目で見て判断しようとする時期に、親や教師の反対を押し切って、自ら中退、A高校受験という人生を左右する大きな決断をし、その結果、A高校で得られた豊かな体験から再び自信を取り戻せたことは、V君にとってきわめて重要な経験であっただろう。彼がこのような歩を進めることができたのは、自ら考え行動することが尊重されるA高校において、親への反抗(中退)という形で表現された主体性の萌芽がじつくりと育まれ、また、中退など自分と同じような辛い経験をもった仲間たちと出会ったことで、悩みや喜びをわかちあう人間関係を築くことができたからではないかと思われる。青年期の若者が自立していく過程においては、自由と自立の感覚を愉しむと同時に、独り立ちするにはまだ足元がおぼつかない自分を痛烈に突きつけられるということも生じる。友人との親密な関係は、彼らの孤独感を癒し安定感をもたらしてくれるきわめて重要なものである(久世, 1996)。青年にとって、親密な友人関係は、親や教師、家庭や学校から心理的に独立していく基盤となるのである。

また、青年にとって親密な友人関係がもつ意味はそれだけにとどまらない。竹内(1987)は、青年にとっての親密な友人関係の重要性について、「自分くずし」と「自分づくり」という言葉を用いて次のように説明している。

「青年は、親密な友人関係がひろがっていくと、自分に課していたコントロールを解いて、友人との関係の中に、これまで漏れ出ることを恐れていた自分の喜びや悲しみ、体験や内的経験、不安や希望を投げ込んでいく。そうした問題を共感的に受け入れ、親や教師、家庭や学校の評価と異なる評価をしてくれる友人の共感的な理解と評価に支えられ、青年は、これまで否定的にしかみることのできなかった自分を改めて評価し、友人の自分に対する新たな評価や判断に応じて、これまでの自分をくずし新しく自分をつくりなおそうとするのである」(p.58-60)。

上の記述をもとにするならば、V君は、A高校で築いた親密な友人関係の中で、友達の共感的な理解に支えられ、これまで否定的にしかみることのできなかった自分を肯定的に捉えなおし、それまでの学校規範に囚われすぎていた自分をくずし新しくつくりなおしていくことができたのであろう。このような強烈な体験が原点となり、彼は、「初めて会った人とでも仲良くなって色んな話ができる」仕事に就きたいという希望をもつようになっていったのではないかと思われる。

2 Wさん

a 入学前

WさんがA高校に入学する前に在籍していた高校は中高一貫の有名私立進学校であり、彼女は中学校からそこに通っていた。いわゆる「よい大学」に入ることを目指す勉強中心の校風であったという。

(勉強を)頑張ることが一番大事って感じでしたね。一秒も無駄にするなって言われて、今思うとすごく病的だなと思うんですけど。・・・すごく感化されてて、一秒も無駄にしないって思ってたんですけど。

中学から高校に進学後、人間関係が希薄で、成績のよいことが最重要視されるその学校に強い違和感を覚えるようになったWさんは、いつしか周囲から孤立していってしまう。部活動に参加していなかったWさんは、クラスだけでなくそれ以外の場所にも腹を割って話せる友人がおらず、そうした孤立感がWさんを精神的に追い詰めていった。その上、高2になった頃から勉強量がとてつもなく多くなり、授業についてい

けなくなってきた。2年の夏には、体がオーバーヒートしてしまったような感じに襲われた彼女は、病院を受診し、医師から学校を休むようにと言われた。Wさん自身は、学校はやめるものではないという思いが強く、医師に止められても必死に登校を続けようとしていたという。しかし、彼女が、親や医師から登校を止められ、学校に行きたいという自分の思いに反して休んでいた期間に、Wさんの体を心配した母親が本人の希望をきかずに高校を中退する手続きをし、A高校を受験する準備を進めていった。Wさんは、親に言われるままに家族みんなに付き添ってもらってA高校を受験、「受けたら受かっちゃった」のだという。彼女は、当時を、「本当に幼かったんで。受験勉強以外の知識がなくて、高校卒業資格に思いをはせることができなかった」と振り返る。このように、Wさん本人は単位制であるA高校のことをあまり知らないまま、この高校に入学した。

b 在学中

A高校では、どの授業も少人数でアットホームな雰囲気があり、教師たちが気にかけてくれた。特に彼女の担任教師が生徒と関わろうという姿勢を持っていたことに「ほっとした」という。しかし、精神的に悩むと登校できなくなることも多く、なかなか自分で学校に行くペースをつくることは大変であったが、教師が待っていてくれるという安心感があった。

担任がすごく良かったんで。みんながご飯食べてるところに来て、なんとなくみんなのことを見ているような。・・・干渉ではなく気にしてくれてる感じで、そうするとみんな来るんですよ。先生が一つの拠り所になるんです。・・・普通は少人数の仲良しグループにしかならないと思うんですけど、うち(のクラス)はまとまっていたね。

Wさんは、A高校で出会った生徒たちにも、「弱いだけに優しい人が多い」という良い印象を持った。そのため、非常に居心地が良かったという。「弱くて優しい、変な人の集まり」の文芸部にも入部し、部室で授業終了後に雑談するなど非常に楽しく過ごせた。部活が気持ちの上でとても大きな居場所となり、仲間もできた。しかしその一方で、Wさんには、その仲間である友人たちと仲良くなりきれず、交友関係が広がっていかないもどかしさもあった。「心から信頼できる親友がほしい」という思いは強いだけでも、人と

深く関わってこなかった彼女にとって、人に近づくことはとても緊張してしまうことであった。そのために、なかなか他のクラスの人と仲良くしたり、授業で出会った人に話しかけたりすることができなかった。そんな中、「大失恋」を経験したWさんは、そのせいで入院するほどまでに体を壊してしまう。「恋愛のことを人に話すなんて恥ずかしい」という思いが強かった彼女は、両親にも友達にも話せず、「切羽詰まって」女性の教師に相談した。そこで、親身に相談に乗ってもらうことができ、人に頼る経験をしたのだという。

親に(相談)なんかとんでもなかったですね。親は事情も分からないで体壊されて、本当にはらはらしたと思うんですけど。私、すごい潔癖で、恋愛とか人に話すのが恥ずかしい、絶対に嫌というのが強すぎて。特に親なんてという感じだったので。・・・(先生への)恋愛相談とかは所かまわずやりました。辛い辛いって。先生も相手の男の子のことを知っていて、親身に相談に乗ってくれました。

また、A高校の授業から得るものも非常に多かった。Wさんは、前籍校では「受験勉強が必要なものかどうか分からない、なぜやってるのか分からない」と感じていたが、A高校では「先生も熱心にその勉強にどんな意義があるかという教え方をしてくれて、何でも身になり、とても新鮮だった」と語る。

しかし、前籍校と比較して、勉強のペースはつくりにくかったようである。授業は、受験に必要なものを選択するという方針で選択したが、それ以上学校全体として大学への進学をバックアップするという体制がなく、大学進学を希望していたWさんは戸惑ってしまったという。「自主性を求められてもついていけず、自分から相談に行くという主体的な動きができなかった彼女は、教師に一度しか相談しないまま「推薦で入れればどこでもいい」という形で進路をきめ、大学を受験することとなった。

c 卒業後

Wさんは、前籍校の単位を1年分持っていたものの、病気で入院していたこともあり、3年かけてA高校を卒業した。周囲の生徒たちが卒業していく中、早く進学したいと焦りながらも、失恋をきっかけに発症した病気が長引いてしまい、大学受験はうまくいかなかった。Wさんは、受験は大変なものと感じ、病気が完治するまでの6年間、大学進学に踏み切るこ

ができなかったという。その間、専門学校を卒業したり、フリーターを経験したりという「すごい回り道をする羽目になった」Wさんは、6年後、4年制の私立大学に合格することができた。彼女は、そこで非常に充実した日々を送っている。

大学では友人関係に恵まれてると思うんですけど。自立というか、相手のことを考えるとか。当時の私は全部自分に向かっていたところがあったんで。(今は)許しあうとか、気楽な友達が。

A高校では、同じ興味・関心をもった部活の「仲間」という関係の中で居心地の良さを味わいながらもその関係を深めることができずにいたWさんだったが、大学では、相手との対等な関係の中で、自立した個人として互いを尊重しあい許しあいながら共にいることができるようになったのである。

d 考察

前籍校で、Wさんは、いわゆる「優等生」だったのではないかと思われる。彼女は、教師の意向に精一杯沿おうと、学校から課される膨大な量の勉強に必死についていったが、無理をしすぎて体が悲鳴をあげてしまった。また、友人との親密な関係も築くことができず、孤立感を深めていった。

当時の親との関係は、Wさんの言葉を借りれば「今から思えば母親が過保護で子どもの意思を尊重しないタイプ」であり、Wさんもそうした親の保護の下、とりたてて葛藤を感じることなく過ごしていたようである。中退も親が本人に相談することなく決め、Wさん自身は「やめてから、やめたんだなって感じた」という。そして、「自分で判断できる状態ではなかった」ため、親の決めてきたA高校を受験し、入学したのであった。

A高校では、担任教師の配慮によってクラスがまとまり、その中に居場所を見つけることができた。Wさんの履修科目を担当している教師にも気にかけてもらい、まずは教師とのタテの関係の中で、安心感をもつことができたように思われる。そして、部活にも入部し、「弱いけれどもその分優しい」仲間たちとともに活動することもできた。しかし、Wさんは、そうした友人たちと深く関わり、彼女が求めてやまない「親友」としての関係を築くことはできなかったという。

そういう彼女にとって、失恋経験は非常に大きな危機となった。誰にも相談できずに、体を壊して入院す

るほどの痛手を受けたWさんであったが、切羽詰って教師に相談したところ親身に聴いてもらい、その危機をなんとか乗り切ることができた。Sさんは、恋愛について、「親との関係が安定していない人はみんな弱いから、寄りかかる人を見つけれなくなっちゃうんですよね」と語っていたが、その寄りかかる人を失ったことを契機に、これまで人と深く関われずにきたWさんが、教師に「恥ずかしい」恋愛相談を打ち明け、頼れたことはきわめて意義深い体験であったろう。「当時、人間関係がうまくできなかったことがとても心残り」と語るWさんは、A高校で、同輩の友人たちとの対等な関係や情緒的なつながりを深めることはできなかったが、教師とのタテの関係の中で、安心して自分をさらけ出し、甘え、依存する中で、人への安心感を育てていくことができたのではないだろうか。

高校生くらいの年齢になると、互いの価値観や理想・将来の生き方などを語り合う関係が生じ、互いの異質性を認め合い、乗り越えたところで、自立した個人として互いを尊重しあって共にいることができるようになるという(保坂, 2000)。高校時代はこうした友人との親密な関係がなかなか築けなかったWさんであったが、A高校での対人関係における体験が、A高校卒業後の様々な進路を模索する自主性や大学での自立した個人同士の親密なヨコの人間関係を築く素地になったのではないかと思われる。

3 Xさん

a 入学前

Xさんは、A高校に入学するまでに、3つの高校を経験している。1校目は私立の女子高であったが、「教師が生徒に強制的に何かを押し付けてくる」という学校の雰囲気抵抗感を感じていた彼女は、その高校を2年次に退学した。その後、両親が決めてきた高校を受験して合格、1年の2学期に編入したが、一度履修した1年次の単位を再度取らなくてはならないことが嫌で3日ほどしか通わなかったという。その高校も中退することとなったXさんは、次に、両親が見つけてきた全寮制高校の2年次に編入したが、屋根裏で喫煙していて天井を燃やしてしまい、強制退学処分となってしまう。その後、家を出て一人暮らしを始め、就職をしたものの、高校卒業資格は必要だと思うようになり、今度は自分の手で自分に合った高校を探したところ、在籍1年で卒業できるA高校を見つけた。

b 在学中

高校卒業資格さえもらえればよいと考えてA高校

を志望したXさんは、高校に「友達をつくる」「何かを学ぶ」「居場所ができる」などといったことは全く期待していなかった。同じクラスに何人の生徒がいるのか分からないほど人間関係も希薄で、悩みを相談しあうような友人のいないことを寂しいとは感じながらも、A高校に来ているのは友達をつくるのが目的ではないと諦めていたという。彼女の場合、仕事をしながらの通学であったため、自分で授業を自由に選び、出席日数を管理できるA高校のシステムは、非常に都合がよかった。学校に所属している意識もなく、修学旅行などの行事にも一切参加しなかったが、Xさんは、全てを自分の責任で決められる生活に大きな充実感を感じていたという。

「デパートみたいに、“すみません”ってこっちが言わなきゃ何も見せてくれない」ような、自ら求めなければ何も与えられない環境も、学校から強制的に押し付けられることに抵抗を感じていた彼女にとっては楽だった。担任以外の教師とはほとんど関わりをもたなかったため、当初は、時間割の組み方がわからず困惑するということもあったが、大学と似たようなシステムだからということで、大学に行っている友達に教えてもらい乗り切ったという。進路については、A高校入学前から進学できれば大学に進学したいと考えていたXさんは、担任教師に相談したり、こまめに進路指導室を利用するなどしていた。そして、卒業時には、推薦で短期大学を受験した。

c 卒業後

Xさんは、推薦で公立の短期大学に進学することができた。この短大入学をきっかけにこれまで音信不通だった両親に連絡をとったところ、両親もとても喜んでくれたという。しかし、彼女は、短大への合格が決まった直後に体調を崩してしまい、そのまま入学後も体調不良が続き大学を休むこととなる。欠席は多かったものの、特別欠席扱いなどの措置により、無事に短大を卒業することができた。そして、卒業後は、英語教諭として働くこととなった。Xさんは、このような進路に進むきっかけとなったA高校について次のように語っている。

自分で、高校卒業しなきゃって思って、探して選んでここ(A高校)入って、上(大学)に行きたいって言って短大にも入って。自分の意思で高校卒業っていう形にこだわって。上に行くんだったら大検でもかまわなかったのだけど、わざわざ通って成し遂げたんですっ

ごい満足です。

d 考察

Xさんは、初めに入学した高校の閉鎖的な雰囲気や、強制的にものごとを押し付けられる教師-生徒関係に抵抗感を感じて退学した。その後入学した2つの高校は、両親が決めてきた高校であり、彼女には押し付けとしか感じられなかったのではないかと思われる。また、3校目は全寮制の学校で非常に厳しく、そうした点も彼女には合わなかったのだろう。

Xさんは、3つの高校を中退後、家をとび出て一人暮らしを始め、自活するようになった。その時初めて、高校卒業資格の必要性を痛感したという。そして、様々な高校を見ていく中で、これまでに修得した単位が活かせる1年間で卒業できるA高校を、自分自身の力で見つけた。

A高校入学後は、親しい友人も学ぶよろこびも見出すことはなかったが、それまでの学校で押し付けられてきた経験とは異なり、自分自身で全てを決定することができ、とても充実していたという。また、A高校志望の最大の理由である高校卒業資格を取得し、進学したいと希望していた大学にも進学することができた。

青年期には、教師や親の言動が矛盾に満ちたものを感じられ、大人に対する批判を強く持つようになる(加藤, 1987)。それゆえ、教師や親との間に対立と緊張が生じやすいという。Xさんが、前籍校の教師に対して感じていた(そして恐らくは両親に対しても感じていた)抵抗感や拒否感、青年期を迎えた彼女の、大人から独立したいという思いや大人に対する批判の気持ちのあらわれと見ることができよう。

表面的に見れば、XさんのA高校での生活は、単に高校卒業資格取得のために単位制を効率的に利用したに過ぎないと見えるかもしれない。しかし、それまでは親の決めてきた高校を受験し入学してきた彼女が、思い切って親元をとびだし、自活を始め、自分の意思で高校入学という選択肢を選び取ったこと、また、必要な時は担任教師など周囲の援助を求めながら自分の力で仕事をしながらの高校生活をやりくりし、当初からの目標であった高校卒業資格を取得することができたのは、A高校が生徒への強制がほとんどなく彼らの自主性を最大限に尊重する単位制という高校だったからではないだろうか。Xさんは、「ここ(A高校)に最初から来てたら卒業できなかったと思う。(最初からA高校に入学していたら)きっと来れなくなってしまうと思う。・・・自己責任ができる年齢だったからよかった」と語っている。3つの高校を中退後、思い切って自立

の歩みを踏み出した時にA高校と出会い、そこで彼女の主体性が押し潰されたり否定されたりすることなく守られ、育まれたからこそ、Xさんに「自分の意思でやり遂げた」という自信と満足感が生まれたのではないかと思われる。

4 Y君

a 入学前

Y君は、中学3年次に学校を転校した。しかし、新しい学校になじめず、不登校気味になっていたという。彼は、その理由を次のように語っている。

目立ってたんでしょね。・・・目つけられちゃって、生意気だって言われたり。・・・中学の時は周りみんなから嫌われて。・・・こっちは何にもしてないけど、向こうから殴りかかってきたこととかあるんですよ。

進路については、高校に進学する必要はないかと思っていたが、行った方がよいとの周囲の説得もあり、「楽して入れる」「変わった」学校はないかと探したという。そして、教師から、その年に新しく設立されるA高校を勧められた。A高校の推薦入学枠が情報科にあったため、Y君は「情報科で何やるのか全然分からなかった」が「人と違ったものがある」と思い、そこを受験することにした。また、自動ドアやエレベーターのある学校らしからぬA高校は、Y君にとって、ありきたりでない「誇れる学校」という風に思えた。さらに、新設校の1期生になるということにも、「一番上に立てる」魅力を感じたという。

b 在学中

Y君は、入学当初は、新しい学校で勉強できることが新鮮で楽しかったという。しかし、所かまわずタバコを吸う人、授業を真面目に聞いてない人、授業中ガムを噛んでる人など様々な生徒がいるA高校には、「全体的に雰囲気が悪く、だらけちゃってる」という印象をもった。教師がそういう生徒たちを叱らないことに対して、「学校らしくない」という腹立たしさを感じていた。また、制服やロッカーなど「学校としてあるべきもの」がないことに、不便さと同時に違和感も抱いていた。特に、私服での通学には、「きちんとしていない」「学校らしくない」という不満をもっていた。

A高校には、クラスごとに固定された教室がないため、授業で席が隣同士になった人とその時間は話しても、授業が終わって外に出るとそれきりということが

多く、友達もつくりにくかった。また、中卒後すぐに入学したY君と同じ年齢の仲間は少なく、年上の人が多かったため、「上にいる人というものに抵抗があった」Y君は、「入ってからいきなり上下関係という形になる」「偉そうな奴がいる」ため、交流の難しさを感じたという。さらには、学校行事がほとんどなく、全体で盛り上がるという機会もなかった。「行事があるからこその学校生活じゃないのか」という思いをもっていた彼は、そのような学校のあり方に寂しさを感じていた。

Y君は、情報科での学習もうまくいかなかったという。推薦枠で受験するために情報科を受験しただけであったため、当初からコンピューターに興味をもてず、どんどん授業についていけなくなってしまった。途中から、彼は、情報科の単位の修得を諦め、他の科の楽しい授業だけを取るようになった。

そのような学生生活の中、居酒屋のアルバイトを始めたY君は、その仕事が楽しくなってきた。彼は、アルバイト先から正社員に誘われ、「仕事をやっている上で、高卒資格って必要ないな」と考えて、高校を中退し就職することに決めた。

c 中退後

A高校中退後、Y君は、居酒屋の正社員となったが、そこで他の社員と揉め事を起こし、転勤させられることになってしまった。結果的に、彼はその職場を辞め、その後様々な職場を転々として、とある会社のサラリーマンに落ち着いた。その仕事でコンピューターを使うようになったY君は、情報処理の知識の必要性を感じ、もう一度A高校に入学しようと思いつき、入学案内を取りに来たという。また、仕事を始めてから高校卒業資格の必要性をひしひしと感じ、「高校辞めると後悔するよっていう周囲の言葉が分かるようになった」ことも、再入学を考えるきっかけになったようであった。

d 考察

中学校時代、「人と違ったものがある」「いるからには存在をアピールしたい」という気持ちの強かったY君は、「生意気だ」と言われて周囲の生徒たちから嫌われてしまい、不登校状態に陥った。そうした中、高校受験の時期を迎え、推薦で入ることのできる高校を探していたところ、A高校のことを知る。人と違うということが非常に重要であった彼にとって、「普通の学校とは違う」A高校は「誇れる学校」であり、「ここでやるとやる」という意気込みをもって入学したという。

しかし、入学してみると、自分で時間割を作成し出

欠を管理しなければならないA高校のシステムに、「自己責任でやらなければ上に上がれない、そういう意味では厳しいな」と感じるようになった。Y君のA高校に対する印象は、「自由でだらしない、緊張感がいまいない」というものであったが、彼は「その流れに自分もつられちゃったというか、ダラダラしちゃった」という。また、入試対策のためだけに選んだ情報科の授業にもついていけず、興味ももてないまま単位修得を途中で投げ出してしまった。次第に、彼は、登校しても授業を受けずにそのまま遊びに行ってしまうようになるようになっていった。3年間の在籍期間のうち、単位を修得したのは最初の1年間だけであった。

また、A高校には様々な生徒が集まってきていたため、「ジャンルの違う人」が多く話しかけづらかったという。さらに、生徒たちが集団としてまとまるような行事もなかったため、なかなか友人をつくるのが難しく寂しい思いをした。

Y君は、A高校での経験を振り返り、「放っとかかるとどっちに行っているのか分からないので、(教師が)個人をよく見てあげる必要があるのではないか」と語っている。

相談室とかに生徒が積極的に行くことは少ないと思うんですよ。だから、先生から問いかけるといいんじゃないかなって思いますね。
・・・授業でも、来なくなった生徒を呼んで教えるとか、補習時間を設けたりとか。(そうしないと)中退してしまう生徒も多いから。

Y君のように、「主体的に行動する」というA高校の要請に応えられず、さらには支えてくれる友人や教師との関係を築くことのできなかった生徒は、自分から積極的に相談に行くこともできずに、いつしかこの高校から足が遠のいてしまうのではないだろうか。とはいえ、中退をした生徒が再び学びたいと思えば、中退前に取得した単位を活かしつつ学ぶことができる点は、A高校のメリットであると言える。

5 Zさん

a 入学前

Zさんは、国立の小・中一貫校に通っていた。小学校はのびのびとした自由な校風であったが、中学に進学すると受験を重視した指導に変わり、Zさんはその雰囲気になじめなかった。もともと、「自分で納得して動かないと何も出来ないタイプ」であったZさんは、

その学校の中で周囲に合わせてただ受験勉強をしていればいいとは思えなかった。中学卒業後の進路に関しては、そのまま附属の高校を受験するという選択肢もあったが、行く気になれなかったという。その頃、Zさんの母親がテレビで観てA高校のことを知り、その後Zさん本人が見学に行ったりガイダンスを受けたりする中で、A高校への進学を希望するようになった。「自分で考えて動きたい」という思いの強いZさんにとって、自主性が認められる単位制高校はとても魅力的であった。

両親にも相談し、高校進学に際してはA高校を第1志望とした。そして、推薦入試では不合格となってしまったが、一般入試で合格することが出来た。

b 在学中

Zさんは、A高校の自由さに戸惑ったことはなかったという。

自由っていうのは責任も伴うわけじゃないですか。・・・A高校に入ることだって自分で決めたことだし、嫌だったらやめていいんですよね。だけど自分で選んで入ってきたんだから、自分で責任を取るのとは当然だと思うので。単位制にはすごく馴染むタイプだったので、それが当たり前だと思った。

臆することなく、分からないことはどんどん教科担任に訊くことができた彼女にとって、時間割をつくるのはむしろ楽しい作業であった。また、自分なりの考えをもった友人たちとも出会い、共感しあえるという経験もした。高校時代は友達と喋るのがすごく楽しかったという。入部したバスケットボール部の友人もたくさんできた。

学習に関しても、在学中は特に悩んだり困ったりしたことはなかったという。進路については、心理学を学びたいということが明確であったため、大学進学を志望した。大学のオープンキャンパスに行くなどして色々と調べ、自分に合った大学・学部を探し、ある4年制大学の受験を決めた。

c 卒業後

Zさんは、自己推薦で4年制大学に進学し、心理学を専攻している。心理学を学ぶにあたっては統計の知識が必須だが、数学が嫌いだったため高校時代に数学をほとんど履修しなかった彼女は、今、大学で非常に苦勞している。しかし、苦勞はしていても後悔はしていないという。

(A高校に)勉強のためには来ていないので問題はないですけど。勉強することが当たり前じゃないというか、色々あっていいという感じがしたんで。全ては望めないし、大学入ってから数学やったんで、統計頑張ってます。

d 考察

Zさんは、受験校のような中学校に拒否感を感じ、押し付けられるのではなく「自分で納得して動ける」A高校への進学を希望するようになった。彼女の親は、そうしたZさんの相談にはのってくれたが、「こうしなさい」ということは一切言わず、彼女の意思を尊重してくれた。Zさんの育った家庭には、自主・自立の風土があったといえよう。

無事、A高校入学を果たしたZさんは、自分のタイプ(型)に合った環境的容れものを探せたことによって自己承認感覚を得ることができた。また、そこで深い考えをもった友人たちにも出会えた。そして、もともと心理学を学びたいという希望が明確であったZさんは、積極的に大学や学部について調べる中で、自身の志望を固めていった。

こうして選んだ大学に、Zさんは無事進学することができた。大学で学んでいる心理学には、彼女の苦手な数学が必須であるが、A高校では履修を避けてしまったため、大学で非常に苦勞しているという。しかし、彼女は、大学よりもA高校のほうが自由であり、「大学はひどい、大学より高校のほうが好き、A高校のほうがいい学校だ」と感じている。

A高校では、思ったことが思ったように出来た。自分の自由で、自分が責任を取れる自由の下で色々できる。責任を任されたという感じですかね。

6. 総合的考察

A 5つの事例から

先述したように、A高校という学校は、6年間在籍可能で、法律を守りさえすれば他に校則はない。また、時間割は個人個人が自分の学習計画に合わせて組むことができる。クラスというまとまりはあるがホームルームはなく、学校全体としての行事もほとんど行われな。面接調査の結果からは、こうした自由な高校の中で、生徒たちが、自ら主体的に動くよう強く求められることが見出された。そして、青年期という、主体性

や自立性を形成していく時期にある生徒たち(もちろん、生涯学習の場でもある A 高校には青年期のみならず様々な年齢層の生徒が在籍しているが)が、実に多様にこの高校を経験し、さまざまなプロセスをたどって成長していくことが明らかとなった。

他校を中退してきた生徒や不登校経験をもった生徒たちの中には、V 君のように、友人たちと中退や不登校という辛い経験を共有し、それを乗り越え、彼らとの深い関係の中での安心感を基盤に A 高校独自のシステムの中で主体性を育み、文化祭実行委員をかって出るなど生き生きとした高校生活を送る生徒もいる。一方、Y 君のように、友人関係を築けず、選択した学科の授業内容に興味をもつこともできず、しかしなかなか自分からは積極的にそれを解決しようと動くことができずに、A 高校の自由さの中で次第に登校しなくなり、中退に至る生徒も存在する。また、W さんのように、「主体性を求められてもついていけない」状態であっても、教師のさりげない配慮によりクラスにつながりつなわれ、悩んで登校がままならない時期も教師に頼って、教師とのタテの関係の中で支えられてなんとか授業に出席し、卒業することができた生徒も存在する。さらには、高校卒業資格だけを求め、高校の中ではその他の活動には一切関わらずに単位だけを加算し A 高校を卒業していく X さんのような生徒もいる。

彼(彼女)らのたどったプロセスを概観してみると、A 高校独自のシステムの下では、生徒たちは自主性の要請を受けるが、しかし自主性を十分に形成していない生徒であっても、W さんのように、教師などつながれる存在を学校の中にみつけることができれば、A 高校の中で有意義な時間を過ごせることもあるようだ。また、高校卒業資格を得るためだけに A 高校に入学する生徒の中には、X さんのように、自分で自分の生活をやりくりしながら、必要最小限の時間とエネルギーしか高校生活に投入しない者もいる。筆者らのインタビューに応じてくれた他の卒業生の中にも、A 高校では単位を取得するだけで、アルバイトばかりの生活を送りながら自分にとって何が面白いのか、どういう仕事に就きたいのかを模索し続けた生徒がいた。このような過ごし方も A 高校では許容されるため、X さんは単に単位制を高校卒業や大学受験のために効率よく利用しただけにとどまらず、あらゆることを自分で決め、自分自身で遂行できたという満足感と自信をも獲得することができたのだろう。さらには、中退経験や不登校経験をもった生徒だけでなく、そういった経験をもたない生徒の中にも、Z さんのように、主体性を

求める A 高校独自のシステムに惹かれて入学し、部活や学習など思う存分自分のやりたいことをやり、友人関係を深め、個性を育てていく者がいる。

このように、5名の生徒一人ひとりの事例から、生徒たちが A 高校をいかに多様に経験しているか、また、中退や不登校を経験してきた生徒が、A 高校の中で実際にどのようなプロセスを経て回復していくのか、ということが示された。以下では、これらの結果を踏まえた上で、面接調査全体から見出された、生徒にとっての A 高校という単位制・無学年制高校の有効性と課題について検討したい。

B 単位制・無学年制高校のシステムの有効性と課題

面接調査の結果から、A 高校独自の自由で柔軟なシステムは、様々な優れた機能を果たしていると同時にいくつかの課題をも有していることが見出された。以下では、筆者が調査の中で感じた単位制・無学年制のシステムの有効性と課題について述べる。

1 中退・不登校経験からの回復

面接調査を実施した44名の事例から、高校を中退するということが生徒に与えるダメージを抽出すると、①自信の喪失、②居場所の喪失、③高校を卒業していないことによって被る社会的不利益の3点が挙げられるように思われる(もちろん、全中退生が3点全てを経験しているというわけではないし、調査対象を広げれば他の要素が挙げられる可能性はある)。A 高校はこうした心理的あるいは社会的な側面におけるダメージを実に適切に補完している。

a 自信の回復

高校を中退した生徒は、その経験から自信を失ってしまうことがある。たとえば事例の V 君は、周囲から「ドロップアウト」などといった否定的イメージを貼り付けられてしまうことによって傷つき、自信を喪失してしまったと語っている。そして A 高校で培った友人関係の中でそこから回復することができたという。

前の高校をやめたりすると、世間では白い目で見られたりとか、世間体が悪くなるのようになって思ったり。他の人から見るとドロップアウトというか否定的なイメージを持たれて。自分は平気だと思ってたんですけど、少し傷ついてた部分があったみたいで、その傷みたいなものが A(高校)では共有のものだった。・ ・ ・それまでのうちひしがれた感じから立ち直

れた。

また、中退によって「自分が何かをやり逃げられる」ということへの信頼が低減してしまうこともある。中退経験を重ねたある女子生徒は、次のように語っている。

高校を出ていないという負い目はなかったんですけど。いくつも高校行ってたんですよ。それをみんなやめていたので、自分は何にもやり逃げられない人間なんじゃないかって。高校出てないってということよりも、積み重ねて終わらせるということが一生できないんじゃないかって、そういう気持ちはあって。何とか卒業できたことがあって、その後も積み重ねていけるという自信がついた。

A高校に入学し、再び通学できるようになることは、一度低減してしまった自信を回復していく上で非常に大切な礎になる。

b 居場所の提供

「高校生」でなくなるということは、もはや学生でも、そして未だ社会人でもない存在になるということである。彼(彼女)らは、まだ充分には成長しきっていない状態で責任を持って働きかける大人のいない空白地帯に放り出される。A高校は、そういった危険性のある若者に対して、居場所を提供するという受け皿としての役割を果たしている。

また、そうした物理的な意味での居場所空間だけでなく、A高校は、V君の事例にみられるように、同じく中退などの経験をもった者たちとの触れあいの場という意味での、所属感を得られる居場所ともなりうる。彼(彼女)らは、その居場所で、他者に受け入れられ互いに共感しあうという経験をする中で、傷を癒したり成長を遂げたりしていくことがある。

c 高校を卒業していないことによって被る社会的不利益の修復

「高校なんて行かなくていい」と考えて高校を中退し仕事に就いた人も、働き始めてみると「高校卒業資格は必要だ」と考え始めるようになることがある。事例のXさんのように、彼(彼女)らは、中退後初めて社会の厳しさを肌で痛感する。A高校は、こうした若者に、働きながら高校を卒業する機会を与え、しかもそれまでの取得単位数によっては1年間でも卒業できるシステムを有している。A高校は、中退者が将来展望

を改めて築きなおす(Xさんの場合、英語教師)ための機会を提供するという、中退者救済機能を果たしている。

このように、単位制・無学年制のシステムは、中退者に対して様々な意味で重要な機能を果たしている。そして、このことは、不登校経験をもった生徒についてもほぼ同様に当てはまると言えよう。A高校の柔軟なシステムは、不登校経験をもった生徒に、①「あれほど行けなかった“学校”に通えている」という経験を積み重ねることによって自信を回復し、②不登校という経験をした自分を受け入れてくれる居場所を見出し、③不登校によって、学習が遅れ内申点が低くなり高校進学も危うくなった結果被る社会的不利益を修復する可能性を提供しているのである。

2 主体性の要請についていけない生徒の存在

a 履修科目の選択という要請

A高校において、「履修する科目を自ら選択する」というシステムに困難を感じている生徒は、人数はそれほど多くはないものの、確かに存在する¹⁹⁾。彼(彼女)らは、「自分で時間割をつくる」という入学直後の課題につまずいてしまうのである。とはいえ、多くの生徒たちは、「自分で自由に時間割を組む」という、自らの将来展望を見据えつつ行わなければならない非常に困難な課題にあまり戸惑いを感じることなく、教師や友人たちなど援助資源の力を借りながら、さまざまなやり方でこの課題に対処しているようである。事例のV君、Wさん、Xさん、Zさんのように、たとえば「大学進学を志望しているので、受験に必要な科目を履修する」といった方針を立てて履修科目を選択するやり方、あるいは「進路は不確定だが、とりあえず好きな科目を履修する」などのやり方があるようだ。また、高校卒業に必要なほぼ全ての単位について履修計画を立てていかなければならない1年次相当の生徒たちに対しては、学校が提供している履修のモデルがあるため、彼(彼女)らはそれに沿って授業を選択することができる。さらに、生徒たちの中には、Zさんのように、主体的に選択できることに喜びを見出し、戸惑いを感じるというよりはむしろ楽しんでこの課題に対処できる者もいる。しかし、次に述べる出欠の自己管理という課題には、困難を感じる生徒が少なくないようである。

b 出欠の自己管理という要請

高校までの教育課程では、学校や親の決めた行動様式に従っていればよかった。その枠組みに沿うことに慣れてきた生徒の中には、自分で出欠を管理しなけれ

ばならないことに難しさを感じている者がかなり多い²⁰⁾。入学当初から主体的に動くことができたV君、Xさん、Zさんらは、無理なく登校することができたが、事例のY君は、「自由でダラダラした流れに自分もつられて、ダラダラしてしまった」「自分から積極的に授業に行かないと上に上がれない」ということに厳しさを感じた。そして、情報科の科目に興味をもてず授業についていけなかったこともあり、その頃誘いがあったアルバイト先で正社員となることを選択し、A高校を中退した。Y君のように、外的な枠組みや規制のない状況の中で、自分の将来展望やその時点での興味に基づいて授業を選び、毎日の生活を組み立てていかななくてはならない事態に困難を感じたと語る生徒は多い。たとえば、ある卒業生(女性)は以下のように語っている。

自由ってすごく不自由だなって思ったんですよ。・・・学校行かなくても怒られないし。遅くまで起きていて寝坊して学校休んでもいいかなって思った時に、普通の高校だったら来ないと電話かかってくるじゃないですか。それがないのでダラダラしちゃって。今日は行かなくていいやって。・・・自分で自分を規制するのが辛かった。

このように、自主性の要請に応えられない生徒は、A高校では非常に苦しい思いをすることがある。中には、Y君のように中途退学に至る生徒も存在する。

とはいえ、A高校では、この要請に応えられないからといって必ずしも不適応に陥ったり、中退という事態に追い込まれるわけではない。入学当初の時点では主体性が見られないような生徒の中にも、事例に挙げたWさんのように、担任教師との関係の中で安心感を得、その関係を起点に友人たちや他の教師との関係を広げていき、部活に入るなどA高校での学生生活を自由に楽しむことができる者もいる。

幼児は未知の環境を探索したり、その中で活動する際に、母親あるいは母親代用物を安全基地として利用するという。幼児にとっての母親や母親代用物のような親近対象物をアンカー・ポイントと言う(山本, 1991)。空間体制化の過程において慣れ親しんだ人や物は認知的にも情緒的にも重要な役割を担っているというわけである。生徒がA高校という未知の環境に入学してきた時、アンカー・ポイントとなるような人や物が存在するか否かということは、生徒の適応状況

にとってきわめて重要である。Wさんの事例にも示されているように、A高校のような枠組みのほとんどの学校においては、生徒がその自由な空間の中に自分を位置づけ、自由に行動できるようになるために、特に教師がアンカー・ポイントとなるような配慮を行う必要があるのではないと思われる。

c 教師による個別的な働きかけの重要性

面接調査の結果を見ると、クラスルームもないA高校において、自分からはつながっていけない生徒が教師の配慮によって学校につながっていきけるということがしばしば生じている。事例のWさんも、「さりげなく生徒と一緒に弁当を食べる」という教師の配慮にずいぶんと救われている。その他にも、顧問と生徒が1対1の同好会をつくる、本来は自由参加の行事を担当教師が自分のクラスだけは強制参加にする、などの働きかけが行われている。

友達のタテとかヨコのつながりっていうのは、自分で動かないとつくるのが難しかったですね。私は、(部員が)一人しかいなかったんですけど、先生とお菓子作り同好会というのを作りまして、週1回やっていました。・・・職員室にはしょっちゅう顔出していましたね。先生と話をしたかったのも大分ありますね。

干渉されないうという所が良い所なんだけど、結局自分次第で、本人だけじゃ無理な場合もあるし。来れる人はいいですけど、来なくても別にいいからズルズルなったり。友達なり周りの人なりの歯止めって必要かなって思ったり。・・・うちのクラスだけ強制参加で球技大会とか参加して、嫌だと思ったんだけどやってみたら良くて。自由参加だったら来てなかったかもしれない。

事例として挙げた5名の面接調査の結果からも示されているように、すべてを生徒の責任に任せるというシステムの要請に応えられる生徒もいるが、一方でそのような要請が過大だという生徒も存在する。後者のような生徒に対しては、システムの構成員である教師が、一人ひとりの生徒に対してきめこまやかに配慮する必要があるだろう。A高校は教員の加配があり、菊地(1993)が指摘するように丁寧な個別指導がなされている。しかし、それでもY君のように一部の生徒が中退していく現実も否めない。自由を保障しながら一

人ひとりの生徒に対して適切な働きかけを工夫していくということは、教師にとって、膨大なエネルギーを必要とするきわめて困難な課題なのであろう。おそらくA高校の教師たちは、日々の教育実践の中で必死にこの課題に取り組み、模索を重ねているのではないかと思われる。

3 生徒の個別化

佐藤(1999)は、単位制のような新自由主義の教育改革の導入によって「選択教科を拡大すればするほど、生徒間の関係も教師と生徒の関係も希薄になり、生徒の学校への帰属意識と学校内の人間関係の共同性が希薄になる」と指摘している。確かに、「単位制は、集団への協調性を嫌い、生徒が個別化し、効率的に単位を修得するだけの場となりがちである」との指摘はこれまでに数多くなされている(たとえば町井, 1995)。われわれの調査の中でも、「集団としての活動がほとんどなかったために楽だった」と語る生徒は少なくない。

クラスの中の人間関係って煩わしかったりするじゃないですか。それがなかったので楽といえば楽ですよ。しがらみがないので。ふらっと授業受けてふらっと帰れる。寂しいかもしれないですけど楽ですよ。だから、人間関係で色々あった人には楽に来られるんじゃないですか。

このような生徒たちは、これまでに苦勞してきた人間関係という圧力がないからこそ、A高校に楽に通うことができている。A高校のシステムにおける生徒の個別化という「問題」の中で、彼(彼女)らが救われているということも否めない。さらに、こうした生徒がいる一方で、事例のV君のように、同じような痛みをもつ生徒集団の中で悩みを共有し、深く関わりあう中で互いに成長していく生徒がいることもまた事実である。単位制における生徒の個別化の問題をどのように捉えていくかということについては、今後も十分な検討が必要だと思われる。

4 単位制を高校卒業・大学受験のために合理的に利用する生徒の存在

川井・中田(2000)は、単位制高校における事例研究を行った結果から、単位制の導入は、「受験科目のみを重視する学習への傾斜を促進させ、学校を、必要単位を修得して卒業するだけの合理的な機関」にしてしまう恐れがあることを指摘している。本調査においても、事例のXさんは、「大検でもよかったけれども、

まずは確実に高校卒業資格をとる」という考えのもとA高校に入学し、友人関係を築くなどといった高校卒業資格を得るためには必要のない活動は一切せずに、仕事をしながら1年間で効率的に単位を修得して卒業し、推薦を得て短大に入学している。彼女の行動は一見合理的なようだが、しかし、彼女のライフヒストリーの中でのA高校の意味を考えると、自らの力で人生を切り開いていこうとする人生の局面でこの高校に出会えたことはきわめて重要な意義があったように思われる。それぞれの生徒にとって「合理的」に見える行動にどのような意味があるかは、十分な検討が必要であらう。とはいえ、確かに、一切の「無駄」な活動を省き、大学受験に必要な科目だけを効率よく累積して卒業に必要な単位を揃え、受験に臨む生徒がいるという事実も看過することはできない。こうした生徒の存在にどう対応していくかは、単位制高校の抱える大きな課題であらう。

5 系統立たない学習

生徒が自分で履修科目を選択するA高校においては、Zさんのように、大学進学後に、専門的な学習を進めていこうとする際に必修となる科目を高校で履修していないために、基礎からやり直さなくてはならないという事態が起こりうる。また、岡部(2004)の指摘によれば、単位制高校の生徒には、高校卒業資格の取得を目指して科目を履修していった結果、卒業の目処がたった時点で可能な進路について考え始める、という傾向もあるようだ。生徒たちのこうした行動の結果、学習が系統立たなくなるという現象がしばしば生じていると思われる。

しかし、Zさんのように、「勉強のためにA高校に来ているわけではない」と語る生徒もいる。生徒たちは、A高校において、系統だった学習よりも、学習の面白さや多様な人間関係、多様な価値観など、それぞれにとって重要な何かを経験し獲得しているのかもしれない。

6 卒業後ギャップ

A高校を離れた後の進路先で、A高校とのギャップに戸惑う生徒もいる。たとえば、Zさんのように、卒業後の進路先(Zさんの場合4年制大学)とA高校を比較して、「今の所よりA高校のほうが良かった、自由だった」と語る者は決して少なくない。

A(高校)は異常なスペース。一種独特の。世代は色々いるけど、一回はじき出された人が入ってくる所だから、そういう意味で社会

とは別物。・・・A(高校)だから普通にやっ
ていける、普通に見える。社会に出れば浮い
ちゃうんですね。

この学校はあまりにも自由に動けてしま
う分、社会に出てからギャップを感じてしま
うんじゃないかなと思います。私の中で今一番
デメリットだなと思ってる部分で、大きい衝
撃だったから。ある程度限りなく自由に動け
る分、社会でのある程度の常識とか組織の集
団生活とかつきあい方とかっていうのをギャ
ップを感じて入っていけないって思ってしまう
んで。

面接調査の中では、「A高校の常識は社会の非常識」
という言葉も聞かれた。しかしこれは、A高校が、そ
の生徒たちにとって、現実では到底ありえないほどの
限らない自由が保障された空間で(現実原則から離れた
場所で)、思う存分主体性を発揮し、それまで何ら
かの理由で抑圧されていた生徒にとっては自分を取り
戻し、生き生きと過ごせた場所であったからではない
かと思われる。そして、この心理療法における治療空
間にも似た「現実には到底ありえないほどの限らない
自由」こそが、中退者や不登校生だけでなく様々な生
徒の成長の土壌となり、主体性を醸成しているのでは
ないだろうか。もちろん、このような自由を充分に享
受できない生徒も存在していて、彼(彼女)らにとっ
ては逆に「放っておかれてもどうしていいかわからない」
という経験になるのだが。

以下に、面接調査のデータの中から、A高校で過
ごせたことを肯定的に捉えている生徒たちの言葉を紹
介しよう。

「自分を発揮できる場所」

「自分中心で居られる場所」

「自分らしさを見つけられたところ」

「自分の意思で、自分がこうありたいからと
か興味があるからやりたいということ、自
分から湧き上がってくる思いを大切にできる
場所」

「自分を取り戻すことができた場所」

このような経験をした生徒たちがA高校の外に出
ていったとき、A高校との大きなギャップに衝撃を受
け、苦しむということは想像に難くない。今後、A高
校において、卒業前の時期にこの種のギャップを和ら
げるためにどのような働きかけがありうるかというこ

とを模索してみる必要があるのかもしれない。

7. 結論

単位制・無学年制のシステムをもったA高校は、
入学までの経験において非常に多様なバリエーション
をもった生徒たちを受け入れ、それぞれの生徒に様々
な成長の機会を提供している。生徒の自主性を強く求
めるシステムでありながらも、まだ主体性の形成され
ていない生徒を必ずしも排除するとは限らないA高
校は、様々な生徒にとって有効なシステムとなってい
るのである。中でも、中退や不登校といった経験をも
つ生徒たちに対しては、彼(彼女)らの回復を心理的な
側面と社会的な側面の両面において実に適切な形でサ
ポートしており、単にそうした経験をもつ生徒たちの
入学を受け入れるという「受け皿」としての機能だけ
でなく、彼(彼女)らの成長を促す機能をも果たしている。

しかし、生徒たちの中には、主体性を要請するA
高校独自の自由なシステムについていけず、授業に出
られなくなり、その結果中退してしまう者も存在する。
面接調査の結果からは、教師たちが、このような事態
を防ごうと一人ひとりの生徒に対して工夫に富んだ細
やかな配慮を試みていることが明らかとなっている。
登校を続けにくい生徒たちに、一方で自由を保障しな
がらも同時にきめ細やかな配慮を行うためには、一人
ひとりについて、彼(彼女)らが今どのような働きかけ
を必要としているのかを探らなくてはならない。これ
は、A高校の教師に課された非常に困難で重たい、し
かしきわめて重要な課題であろうと思われる。

さらに、A高校独自のシステムの課題として、①集
団での活動が行われないうちに共同性が失われて生徒
が個別化してしまうこと、②単位制を大学受験のため
に合理的に利用する生徒が存在すること、③生徒が自
分で履修科目を選択するために学習が系統立たないこ
と、④A高校卒業後の進路先で自由を最大限に保障さ
れたA高校とのギャップに戸惑う生徒がいること、
などが見出された。しかし、一方では、そうしたシス
テムの下で、①集団での活動を極力なくすことで、そ
れまで失敗してきた人間関係の重圧から解放され楽に
登校できるようになる生徒、②単位制というシステム
のおかげで、高校生活にかかるエネルギーを最小限に
して自活し、自分で自分の生活を管理しながら高校生
活を送り、自立のプロセスを歩んでいくことができる
生徒、③学習は系統立たないが、学習の面白さや、勉
強だけでない多様な価値観を学ぶことができる生徒、

④A高校の、現実の社会ではありえないほどの自由さの中で自分らしさを発揮できる生徒、なども存在する。A高校がこれらのメリットを十分に活かしながら、現在つきつけられている課題にどのように取り組んでいくのかについては、さらなる模索が必要であろう。

本研究は、A高校という一つの単位制高校を対象とした事例研究である。しかし、先行研究において、A高校のもつ課題と同質の課題を抱えている単位制高校は数多く存在することが示されている。A高校の模索は、今後、単位制高校がより有効に機能していくためにもきわめて重要な意味をもつものと思われる。

註

- 1) 中央教育審議会答申「学校教育の総合的な拡充整備のための基本的施策について」1971年6月
- 2) 中央教育審議会答申「新しい時代に対応する教育の諸制度の改革について」1991年4月19日
- 3) その結果、2004年度の高校における不登校数は67,500人であり、全在籍者の1.82%を占めていることが明らかとなった。
- 4) 平成16年度「生徒指導上の諸問題の現状について」のデータによれば、高校における不登校生徒のうち、中退にいたった者は24,725名であり、不登校生徒数に締める割合は36.6%ときわめて高いことが示されている。また、同年に、原級措置となった者は7,551名で、不登校生徒数に占める割合は11.2%であった。
- 5) 平成16年度「生徒指導上の諸問題の現状について」のデータにおいても、全ての課程・学科において、1年生の中退者数・中退率が他の学年に比してもっとも高くなっている。
- 6) 吉岡 良 2002 不登校、中退者の進路選択を支援 内外教育第5291号 p.9
- 7) たとえば、中央審議会答申「新しい時代に対応する教育の諸制度の改革について」(第29回答申(平成3年4月19日))では、中退の増加には中学校の責任も否めないとし、「中学校段階での、偏差値に強く依存した進路指導は、中学浪人をさせずに高等学校へ効率良く子どもを送り込むという目的にはなっていないもの、生徒の素質や能力、希望や進路などを十分に斟酌していない。進学した高等学校が希望に合わないために面白くないとか、レベルが高すぎてついていけないといった不満がしばしば起こっている。高等学校までは誰でもがほぼ進学する今日、希望しない学校に進学し、学校への誇りや学習への意欲も持ちにくい、といった一群の不幸な生徒たちが発生しているのである」と述べられている。
- 8) 文部科学省「平成16年度 生徒指導上の諸問題の現状について」
- 9) 文部科学省「平成16年度 生徒指導上の諸問題の現状について」のデータによれば、平成16年度の高等学校における不登校生徒67,500人のうち、中学校時に不登校経験のあった者は14,245人であった。
- 10) 文部科学省「平成16年度 生徒指導上の諸問題の現状について」
- 11) 臨時教育審議会「第一次答申」1985年6月26日

- 12) 「単位制高等学校の基本的在り方について」1986年10月17日
- 13) これについては、菊地(1996b)に詳しい。
- 14) 川原・菊地・三戸 2003 単位制・無学年制高校の生活の諸相 (1) - 質問紙調査の結果を基に - 宇都宮大学教育学部紀要 第53号 第1部 121-139
- 15) 平成3年4月～平成12年3月末までにA高校に過去在籍した全卒業生・中途退学者2044名を対象に郵送で発送し、平成12年9月を回収期限とした。その結果、宛先不明で返送されてきた388通を除いた1656通が届き、330名(男性118名、女性209名、不明3名)からの回答が得られた。回収率は19.9%であった。
- 16) 中央教育審議会答申「新しい時代に対応する教育の諸制度の改革について」1991年4月19日
- 17) たとえば、文部省科学研究費研究成果報告書 1995 『高等学校における学科編成・履修システムの改善に関する総合的研究』(研究代表者 佐藤 全)国立教育研究所 など。
- 18) 川原・菊地・三戸、前掲書
- 19) われわれの質問紙調査の結果では、「自分で時間割を作るのは煩わしく負担に思った」という項目に「あてはまる」と答えた卒業生は1.9%、「ややあてはまる」と答えた生徒は6.9%であった。逆に、「色々な開講科目があって、時間割を自由に作れてよかった」という項目に「あてはまる」と答えた卒業生は61.5%、「ややあてはまる」と答えた生徒は29.7%であり、よかったと答えた生徒のほうが圧倒的に多いという結果が得られた。
- 20) われわれの質問紙調査の結果では、「出欠は自分の責任なのでサボりやすく、欠席が多くなったし、安易な学校生活になった」という項目に「あてはまる」「ややあてはまる」と答えた生徒は、あわせて27.3%であった。

主な引用文献

- 藤田英典 1988 高校中退問題に関する一考察 昭和62年度特定研究成果報告書 子どものドロップアウトに関する教育学的研究 87-104
- 保坂 亨 2000 「子どもの心理発達と学校臨床」近藤邦夫・岡村達也・保坂亨(編) 『子どもの成長教師の成長-学校臨床の展開』 東京大学出版会, 333-354
- 飯島修治 2000 「単位制の理念と現実」近藤邦夫・岡村達也・保坂亨(編) 『子どもの成長教師の成長-学校臨床の展開』 東京大学出版会, 235-251
- 今西幸蔵 2000 単位制高等学校の現状と課題に関する考察 京都学園大学人間文化学会紀要 第3号 45-80
- 川原誠司・菊地まり・三戸親子 2003 単位制・無学年制高校の生活の諸相(1) - 質問紙調査の結果を基に - 宇都宮大学教育学部紀要 第53号 第1部 121-139
- 川井大文・中田スウラ 2000 現代「教育改革」における新自由主義-単位制高校を事例とした「自由な選択」に関する分析- 福島大学教育実践研究紀要 第38号 127-134
- 加勇田修士 1997 単位制高校における進路指導 青少年問題 第44巻6号 10-16
- 菊地栄治 1993 高校教育改革研究の成果と展望 研究代表者 牧昌見 高校教育改革の成果と課題に関する調査研究 中間報告

- 書 平成4年度 文部科学研究費補助金一般研究 A
- 菊地栄治 1994 東京都立新宿山吹高等学校 研究代表者 牧昌見
 高校教育改革モデルの浸透可能性に関する実証的研究 最終報告書 平成5年度 文部省科学研究費補助金一般研究 A 63-77
- 菊地栄治 1996a <ゆらぎ>としての単位制高校 国立教育研究所研究収録 32号 17-29
- 菊地栄治 1996b 「高校教育改革の「最前線」」 耳塚寛明・樋田大二郎編著 『高校教育改革シリーズⅡ 多様化と個性化の潮流をさぐる－高校教育改革の比較教育社会学－』, 学事出版
- 木南千枝 2005 学校内適応指導教室としての別室登校の試み 臨床心理学 Vol.5 No.1 27-33
- 久世敏雄 『青年心理学』 放送大学教育振興会, 1996
- 町井輝久 1995 高校教育改革と単位制高校についての一考察 北海道大学教育学部紀要 第66号 95-114
- 岡部善平 2004 単位制高校における生徒のカリキュラムへの意味付与に関する事例研究－生徒の単位取得過程の分析を中心に－ 小樽商科大学人文研究 第107輯 1-20
- 佐藤 学 『学びの快樂』 世織書房, 1999
- 新海英行・新田照夫 1986 高校中退の現状と課題(1)－愛知の場を中心に－ 名古屋大学教育学部紀要(教育学科) 第33巻 339-352
- 相馬誠一・花井正樹・倉淵泰佑編著 『適応指導教室－よみがえる「登校拒否」の子どもたち－』 学事出版, 1998
- 竹内健児 1998 「退学希望のそれぞれの意味」 村山正治・山本和郎編 『臨床心理士のスクールカウンセリング③ 全国の活動の実際』 誠信書房, 164-176
- 竹内常一 『子どもの自分くずしと自分づくり』 東京大学出版会, 1987
- 友清由希子・森川友子 2004 高校中退研究の動向と課題 福岡教育大学紀要 第53巻 235-245
- 和田憲明 1999 「働きかけても, 変化の起こらない事例」 吉川悟編 『システム論から見た学校臨床』 金剛出版, 247-255
- 山本多喜司・S・ワップナー 『人生移行の発達心理学』 北大路書房, 1991
- 横尾浩一 1997 「単位制高校の実践と展望」 菊地栄治編著 『高校教育改革の総合的研究』, 多賀出版

付記 調査にご協力いただきましたA高校関係の皆様
 に深く感謝申し上げます。また、本論文の執筆にあたり、
 近藤邦夫先生(東京大学名誉教授)から多大なご支援を賜りました。
 心よりお礼申し上げます。